
「闇の使者とバスジャック。」

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「闇の使者とバスジャック。」

【Nコード】

N0198I

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

2月23日（日）コナンと真弓は博士や少年探偵団の仲間達と共にスキーに出かけようと都内バスに乗り込んだ。と同時に楽しく談笑していた。時に真弓が行き成り怯えを見せた。そのバスの中には何と黒の組織の仲間が客の中に変装して紛れ込んでいた。しかし・・次の瞬間コナン達が乗っていた都内バスがバスジャックされてしまう。果たして・・コナン達の運命は？

作者からのご観覧へのご注意。 (必読でお願い致します。) (前書き)

作者自身此方も此方で時間が掛かると思いますが

此方も此方で頑張って書かせて頂きますので

どうぞ宜しくお願い致します。

作者からのご観覧へのご注意。（必読でお願い致します。）

作者5作目です。と同時にまた組織編です（笑；；）尚・・・この小説に関しましては名探偵

コナンの29巻のバスジャック編を作者の一応アレンジで書かせて頂きます。

尚予めお断りしますが・・・。

此方にも第1作目と2作目・・・3作目・・・のオリキャラ（夏美達）を含むどれかが出

る可能性もありますのでご理解とご了承頂きたいと思えます。

尚此方にも恐らく残酷シーンが入る可能性もございます。

ので其方も其方でご理解とご了承願います。尚、苦情等は一切お受け

出来ませんので・・・。

其方も其方でご了承いただきたく、また評価等ございましたら何時もの様にお

手柔らかにお願い致します。（作者が書く組織だとしても・
（汗））

また、これは後書にも書かせて頂きましたが・・・。

もしかしたら違うジャンルのキャラも出る可能性もあります。

その場合にはその章の前書きでお知らせ致しますのでその辺もご理解とご協力の

程宜しくお願い致します。

作者からのご観覧へのご注意。（必読でお願い致します。）（後書き）

前書きにも似たような事書かせて頂きましたが・

作者が書く小説は殆ど組織ものです。

組織が嫌いな方のご観覧は大変に申し訳ありませんが

ご観覧しない事をお勧めいたします。

と同時にこの作品は29巻の部分を作者のオリキャラ

を交えて書かせて頂くので純粋な原作ファンの方のご

観覧を控える事をお勧め致します。

と同時にもしかしたら違うアニメのジャンルのキャラ

も出てくる可能性もございます。其れに関しましては

その章で前書き等でお知らせ致します。

くどい様で申し訳ありませんが・・・

苦情等は一切お受け出来ませんのでご了承願います。

其れでは・・・闇の世界へとどうぞ。

第1章。見えない闇の恐怖と表。（前編）（プロローグ）（前書き）

早速の更新です。普段はプロローグを書かせて頂くんですが、今小説では此方がプロローグ

とさせていただきます。のでご了承下さい。

今章では手始めにジンの兄貴様方から始まり・

最後に夏美達で終わります。

此方もまだ続きますので前後編に分けさせて頂きま

す。尚お断りしますが・今章ではジャンル違いの

キャラも出ています。其れは「シティーハンター」

の野上冴子さんです。尚・・ご注意の部分にも書かせ

て頂きましたが違うジャンルで個人的にこの人でたら

面白そうかな？と言う方に関しましては

全買ではないですが出させて頂いております。

のでその辺もご理解とご了承願います。

尚今章は長丁場及び多少残酷な面もございますので

此方も此方でご了承下さるよう重ねてお願い申し上げます。

第1章。見えない闇の恐怖と表。（前編）（プロローグ。）

此処はとあるバー。

ジンとウォッカが仕事帰りに飲みに来ていた。

勿論・・ジンの側にはジンの恋人であり夏美の姉でありワカバの秘密情報局長の橘梓が居た。

そしてウォッカがジンに今回の仕事後の話をしていたが・・ジンは只タバコを黙って吸ってい

た。梓も黙ってジンを心配そうに見つめた。

すると1人のウェ이터がジン達の席にやってきてそのバーの歌姫からのおごりと言う

ドライマティーニを持って来てウォッカがグラスを持った途端ジンがドライマティーニに

今まで吸っていたタバコを入れそのウェイターに向けて「何の真似だ？」

ウェイター「は？」と最初と驚いたがそしてジンウェイターの髪を持ちテーブルに

あったアイスピックを持ちダンと押し付け「どういう了見だっと思ってるんだ！！」と更に続け

て「ベルモットッ！！」

すると軽くジンの手から逃れたベルモットが「Oh！I'm just kidding（オー、アイムジャスト

キディング！（冗談よ！冗談！）」と更に続けて「あの歌姫に鼻を伸ばしていた

誰かさんをからかっていただけ。」

するとウォッカが慌てながら「い・い・いんですかい？！あんな程の有名女優が

俺達と一緒に居る所を見られたら・・・。」

ベルモット「別に大丈夫よ。他の客もあの歌姫の歌に夢中みたいだから・・・。」

するとジン再びタバコを取り出しながら「其れより、例の探し物は見つかったのか？」

ベルモット髪を結わきながら「・・・そうね。本命はまだつかしら・・・。」

ウォッカ「本命って・・・ソロソロ教えてくださいよ。今何処で何をやっているか。」

ジン「・・・無駄だ。この女の『秘密主義』は今に始まった事じゃね

え。
」

其れを聞いてベルモット「あら。女は、秘密を着飾って美しくなるものよ。」「と続け様に

梓を見て「ねえ・・・？梓。
」

梓ジンライムを飲みながら「・・・い、行き成り私?!」「と続け様に
「まあ・・・ね。
」

でも、秘密ばかりではかえって、つまらないわよ。」「

ベルモット「あら？そう。
」

梓「ええ、そうよ。
」

ベルモット「でも・・・貴女の、妹ちゃんたち、も秘密があるんじゃない
なくて?」

梓「さあ・・・でも、2番目の妹有理はともかく・・・1番目の妹の夏美はあの子は

多分少なくとも、私よりかは秘密を抱えている。と言えるわね。」

ベルモット「へえ？そう。その‘秘密’知りたいわ。」

梓クスと笑い「そんな事言ったら・・・私があの子に‘どやされちゃうわ’。」

するとジン「そう言えば・・・妹達はどうしてる?」

梓タバコを取り出し火を灯し「有理は多分ワカバのアジトにいるんじゃないかしら?」

と続け様に「そんでもって夏美なら・・・多分神奈川県警に呼ばれたわ。」

ウォツカ其れを聞いて「え？か・・・神奈川県警にですかい？！夏美さん何されたんで？」

梓再びクスと笑い「大丈夫よ。心配ないわ。ウォツカ。只・・・うちの兄に呼ばれただけ。」

するとジン「雄大にか？」

梓「ええ。何せ・・・夏美自身の知り合いの女性警部が警視庁から今日偶々神奈川県警に来てね

その人の仕事依頼で・・・兄さん経由で来たらしいけど・・・でもね、夏美自身その女性警部が苦

手らしいのよ。」

ベルモット「あら・・・そうなの？」

梓「ええ。何せ・・・ある意味、厄介な仕事ばかり、もって来るってあの子言っていたから。」

すると、バーに夏美が1人の女性と共に入って来た。

ウオツカ「あ・・・噂をすれば夏美さんいらしたようですね？」

梓「あ・・本当ね。よし。」そう言い事前に夏美に仕掛けておいた小型カメラ付き盗聴器

をスイッチを入れたと同時にパソコンを取り出しジン達に見せた。

すると、夏美はその女性とジン達と多少離れたテーブル席に付き

バーテンにお勧めのカクテルを頼んだ。

そして夏美タバコに火を灯し笑いながら「本当に・・貴女には、厄介な仕事ばかり、」

持って来させられた気がしますよ。」

するとその女性がクスと笑い「あら・・？そう。私は別にそう、思っていないけど、？」

夏美タバコ吸いながら苦笑いをし「・・・たまには、自覚してくださいよ」。冴子さん。

と同時に私がオフの日に仕事依頼しないでくださいよ。」

夏美と話しているその相手は野上冴子。警視庁の捜査一課の警部であり、

雄大と夏美の知り合い。

冴子再びクスと笑い「ごめんなさいね」。でも・・・警視庁では調べられない事も

中にはあるから。」

夏美頭を抱えながらハアとため息を付き再び苦笑いをし「勘弁してくださいよ」。

幾ら・・・私でも「限度が」。」

冴子再び「ごめんなさいね。だって・・・貴女に分家とそして対立している広州の

メンバーから警視庁へと指名手配者が出てしまっているから・・・この事はねどうしてもね?。」

夏美「・・・左様ですか。」と呆れるばかりと続け様に「で?今回の仕事の内容は?。」

すると冴子バックから2枚の写真を取り出し「この2人なら・・・貴女も「知っているわよね」

「?」

夏美その写真を見ながら「ええ。右側はうちの分家の人間で橘舞子。
んで・・その左側が

広州のメンバーであり舞子の恋人である。鮑崎遊戯。かなざきゆうぎ」と更に続けて

「んで？この2人が、何しでかしたんで？」

と話をしている最中にウェイターがカクテルを持ってきた。

1つはジンライム。

もう1つはエメラルドグリーン。

夏美はジンライムをそして冴子はエメラルドグリーンを取って2人で乾杯し飲み始め

ながら話を続けた。

冴子「この2人は・・警視庁から脱殻した強盗犯なんだけど・・どうも、広州がらみの事を

上層部に話したらワカバに情報を洗ってもらって提供するようになるとのお達しが来たのよ。」

夏美「ハハッ・・其れはとりあえず、納得できるかも」。この2人ならうち等^{ワカバ}

も追っていますしね。」

冴子「どう？夏美？お願いできるかしら？」と続け様に「もし、受けてくれるなら、」

その報酬代わりとして今回の飲み代私が払ってあげるわ。」

夏美「・・・分かりました。引き受けますよ。」と堪忍したように言
った。

冴子「あら？本当に？有難う。恩に着るわ。」と微笑んだ。

と同時に「あら？顔が引きつっているけど大丈夫？」

夏美「い・・・いや！大丈夫ですよ！！」と笑いながら誤魔化した。

と続け様に心の中でジンさん達が此処に来ていた事を見たなんて

言えないよな・・・。

と苦笑いをしながら呟いていた。

第1章。 見えない闇の恐怖と表。 (前編) 完。

第1章。見えない闇の恐怖と表。（前編）（プロローグ）（後書き）

お付き合い下さり有難うございます。

作者第5作目です。時間は掛かると思いますが

暖かく見守って頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「・・・次章もどうぞ宜しくね。」

第2章。見えない闇の恐怖と表。（後編。）（前書き）

此方は前章の後編となります。

此方も野上さんや冴羽さんが出ます。（違うジャン

ル）ですが……。汗その辺もご了承ください。

尚、冴羽さんの下の名前は本当は漢字なんですが・

変換しても出て来なかったので・カタカナに

させて頂きました。其方も其方でご了承ください

様お願い致します。

第2章。見えない闇の恐怖と表。（後編。）

冴子その様子を見て「どうやら・・・お姉さん」も居るみたいね。」とクスと笑いながら

夏美を見た。

夏美ギクツ！となり「ハハ・・・まあ。」と続け様に「ささ・・・」
気を取り直して、

飲み続けましょう。」と慌ててジンライムを飲み始めた。

その様子を盗聴器からのカメラに写されたパソコンから見ていた梓
がクスと笑い

「もう・・・夏美ったら、相変わらずね。」と続け様にジンを見て
「お願いだから・・・」

今度会った時に「苛めないでよ」？」

其れを聞いてジンタバコ吸いながらニヤリと笑い「心配するな。只・
・「可愛がつてやる」

だけさ・・。」

なあ・・？

夏美。

すると夏美に一瞬「悪寒」が走った。

夏美

ハハハ・・・。

此れ、絶対に、ジンさん見ているよ、

今度会った時に・・・。

多分・・・。

‘どやされるな’。

と心の中で呟いた。

すると、冴子「ねえ・・・？夏美。」

夏美「はい。」

冴子「2月23日の日曜・・・貴女予定ある？」

夏美「ああ。その日ですか？オフだった気がしますんで・・・。久々に出かけようかな。」

と思っています。」

冴子「何処に行く予定？」

夏美「今はまだ・・・決まってません」。取り合えず都内にしようかと・・・。」

冴子「そう。」

そう言い冴子の携帯が鳴る。

冴子「ごめんなさいね。」と続け様に「はい。野上ですが。」

すると男の声で「よう！冴子！俺だよ。」

冴子「あら・・・？その声もしかしてリヨウ？」

冴子の話し相手はシティーハンターと呼ばれる冴羽リヨウ。闇の中では

知らない者は居ないスナイパーだ。

夏美

おいおい・・・。

冴羽さんから連絡あるなんて聞いていないよ。

また・・・どやされるネタが増えたな。私じゃあ。

そして、冴子「分かったわ。じゃ・・後でね。」

そう言い電話を切った。

と同時に夏美の前に封筒を置いて「ごめんなさいね。夏美。此れからリヨウと会って来るか

ら・・・。

先行くわね。最初の一杯目はおごらせてもらっわ。」と続け様に「もし、飲み足りなかったら

此れを足して構わないから。」と更に続けて「もし、飲まなかったらこの封筒に入っている

もの貴女の好きな様に使っていいからね。」

夏美半信半疑で「わっ分かりました。」と続け様に「ほ、本当に、

良いんですか？」

冴子微笑んで「ええ。もちろんよ。日ごろの『仕事手伝いのお返し』。」

夏美「これで・・今度会った時に『仕事追加』はやめてくださいよ。」と苦笑いをしながら

言った。

冴子「『考えておくわ』。」

夏美「基本的に冴羽さん経由の『仕事しか請けたくないですからね』。」

冴子その事を聞いて「まあ・酷いわね。」とクスと笑いながら付け加えた。

と同時に「じゃ・・例の件、宜しくね。」そう言い席を立って「またね。」

夏美「ええ。冴羽さんとその、引き取った娘、さんにも宜しくお伝え下さい。」

冴子「ええ。伝えとくわ。」

そう言い冴子は先に帰った。

夏美灰皿にタバコを揉み消し再びタバコに火を灯し携帯を取り出しメールを打って送信

した。

そして残り少ないジンライムを飲み干しウェイターにもう1杯ジンライムを頼んだ。

するとメールが返って来たその相手はライフエイ。

そのメールの内容は

了解。

調べとく。

夏美そのメールを見てタバコ吸いながら

悪いね。

頼むよ。

そう返信した。

と同時に「2月23日か……。何か、ある意味嫌な予感が、し
そうなんだよな。」

と呟きながら先程頼んだジンライムを飲み始めた。

すると梓が夏美と同じジンライムを持って寄って来て「Hi。夏美。」

夏美「ああ。姉さんか。」と続け様に「丁度良かったわ。」

梓「何？」そう言い席に座った。

夏美デニムの左ポケットから1枚の紙を取り出し「『仕事』。」

（仕事＝ワカバの秘密情報局の任務。）

梓その紙を手に取り確認すると「了解したわ。」

夏美「ごめんね。宜しく。」

すると梓「ねえ・・・結局野上さんとは、何話していたの、？」

夏美タバコ吸いながら「ハハ・・・どうせ、聞いていたんでしょ、？」

梓ジンライムを飲みながら「あら、ご名答、ね。」

と続け様に「ジンも結構、気にしていたわよ。」

夏美「ハハ・・・」

と苦笑いしそして梓夏美を見て「夏美・・・。2月23日出掛ける予

定なんですってね?」

夏美頷いた。

梓「気を付けなさいよ。」

夏美「ああ・・・気を付ける。」

そう2人の姉妹の会話が続いた。

そして・・・案の定ジン達も夏美達の所に来て夏美はアレからジンに
「どやされる」事

となった（笑）と同時に・・・これが、夏美達の勘が当たる前兆、にもなった。

第2章。見えない闇の恐怖と表。（後編。）完。

第2章。見えない闇の恐怖と表。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はバスジャックの所から書かせて頂く

予定です。（多分）次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

冴子「次章もどうぞ宜しくね。」

第3章。悲劇の2月23日（日）前編。（前書き）

此方も多少日を空けてしまいましたが・・・。（汗）

今章はバスジャックの前触れみたいな感じで書かせて

頂きましたと同時に予めお断り致しますが、この

バスジャック編はコナンの単行本29巻を元に

管理人の多少ではありますがアレンジさせて頂き

ました。ので・・・アレンジが許せない方等の

ご観覧は申し訳ございませんがお控え下さる様

お願い致します。此れは多分中編と・・・後編と分けて

書かせて頂く予定となっております。その辺も

ご了承下さい。

第3章。悲劇の2月23日(日)前編。

そして、2月23日(日)。

とある都バスが道路を走っていた。

すると「ひつくしゅん！へつくしゅん！」

と同時に鼻をかむ音が響く・・・。

コナン「おいおい。博士・・・そんなんでスキー行っても大丈夫なのかよ？」

すると哀「まあ・・・『自業自得』ね。風邪引くから止しなさいって言ったのに・・・。」

まるで其れに合せて真弓「そうそう。そんでもって・・・夜遅くまでスキーのハウツービデオを

見てイメトレしていたんだからさ・・・。」

すると博士苦笑いしながら「仕方ないじゃろう・・・。ワシは子供達の引率者。大人のワシが

手本を見せてやらないといけないからな・・・。」

すると歩美心配そうに「でも、向こうに着いたらちゃんとロッジで寝ているんだよ?」

光彦も元太も後ろ見ながら・・・。

光彦「風邪は引き始めが肝心って言いますし・・・。」

元太横目で「調子に乗って外に出るんじゃないやねえぞ?」

博士「あ、ああ。」

一方コナンは横目で苦笑いしながら

どっちが、子供か分からねえじゃねえか。

と同時に哀も真弓も

・・・同感。

そして、都バスは米花公園前のバス停で止まり博士「これ、他のお客さんも乗ってくる。

前に座らんか。」

光彦、元太「ほーい。」

そしてコナン「はぁ・・・。」

その様子を見て哀笑いながら「あら？退屈しすぎて死にそうな顔ね。」

と続け様に「早く事件に遭遇したい顔をしているわよ。」

コナン「あん？」

其れに続き真弓も笑いながら「それとも、出会いたいののはあの男達のほうか？」（黒ずく

め）「

その事を聞いたコナン「バーロ。こんな狭い空間で博士達が居る場所
で奴等に会いたい訳が

・・・」

と同時に黒い服のご老人が乗ってきた。

其れを見てコナン

く、黒ずくめの男?!

その様子を見て真弓「いや・・・違うね」。

コナン「え?」

哀も「ええ。彼は、違うわ。」と続け様に「分かるのよ。」その組織の者だけが

している、独特の嫌な匂いがね。」と続け様に「ねえ？碇さん。」

真弓頷いて「ああ。私じゃあも、感じるんだよ。」

と続け様にコナン真弓の服の袖を嗅ぎ始めて「別に、変な匂いなんてしねえけどな。」

真弓横目で「おいおい……。ふざけないでくれよ。相棒……。」

と同時にコナン「でもよー。そんな第6感があるんだったら……。シヤンメリーの時だって

。。。」

真弓「ああ。。。薄々そう、思っていたさ。」

其れを聞いたコナン「おいおい。じゃなんであの時、教えてくれなかった、んだよ？」

真弓「自信がなかったんだ。」と続け様に「其れに・・・もう1人居たような気がした」

からさ。」「と更に「そう。。。シャンメリーの奴よりももっと強烈で、魔性の」

オーラを持った。。。」「そう言いかけたその時「!!!!!!!!!!」

真弓の体に一瞬、悪寒が、走りと同時に行き成り怯え始め・・・「あ、

相棒。わ、悪いが・・

せ、席を替わって私じゃあを隠してくれ。」

コナン「え？」

真弓「た、頼む。」　そう言い緑のフードを被った。

すると、新出先生とその後ろに外国人女性と夏美がライカと共に乗り込んで来た。

歩美と光彦「あ！新出先生！」

新出「あれ？みんなも乗っていたのかい？」

すると光彦「先日は内科検診お疲れ様でした。」

新出手を後ろにやりにこやかに「いやいや・・・。」

するとコナン真弓に「新出先生がどうかしたのか？」と続け様に「
そっついや・・・おめー

内科検診の日休んでいたよな？」

すると元太からかいながら「お！先生今日はデートかよ。」

新出「いや・・・彼女は僕が校医を担当している帝丹高校の先生で・
。。。」

するとその女性が「Hi クール・キッド！また会いまーしたね！
！」

そして博士「知り合いか？」

コナン「あ、うん。彼女は蘭姉ちゃんの高校の英語の先生で・・・。」

するとその女性は「私の名前はジョディ・サンテミリオン。今日は、Dr。新出と上野美術館

デートです！」

新出椅子に座りながら「あ、いや・偶然バス停で会っただけなんだ。」

其れを聞いてジョディ「Oh！レディに恥をかかせてはいけません！」

すると新出苦笑いしながら「だって、お互いに高校で、変な噂立っても、お互いに困るでしょ

？？」

ジョディ「Oh! yes!」

と同時に夏美「いやはや・・賑やかなかった。」と笑いながら
後ろの席に向かつて

ライカと歩いていた。

歩美「あれ？夏美お姉さん達まで？今日はどうしたの？」

夏美「いやはや・・たまには都内をバスで回ろうとね。只・・そんな感じさ。」

ライカも笑いながら「そうそう・・たまにはこういうのもありって
事でね。」

光彦「あ！でも・・夏美さん、ライカさん。車内の喫煙はお分かり
かと思いますが

「駄目ですよ」？」

夏美とライカ苦笑いをし「ああ・・・分かってるよ」光彦君。「そう言いじゃ後で・・・」

そう言つて後ろの席に座つた。

と同時にマスクをしたニット帽のロングコートを着た男が乗つて来て後ろの席に座り

「ゴホゴホッ」と咳をした。

と同時にコナンも気になったのかアレカラ震え続けている真弓を見てそして後ろの席をも見

た。その男が一瞬コナンの方に目をやった。

夏美達は只お互いに楽しく話をしていた。

と同時にスキーウェアを来た2人組の男が乗ってきた。

それが・・・『悲劇』になるかも知れない事をその時は『予測していなかった』。

第3章。悲劇の2月23日（日）前編。完。

第3章。悲劇の2月23日（日）前編。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はコナン達のバスがジャックされる所から
書かせて頂きたいと思います。尚・・題名の曜日に
関しましては管理人が独断で付けさせて頂いたもので
す。ので此方も此方でご了承下さいます様お願い致し
ます。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ
幸いです。

オマケ・・。

哀「碇さん？」と続け様に「次章もどうぞ宜しくね。」

第4章。悲劇の2月23日（日）中編。（前書き）

前章の中編です。

此方にも残酷な？シーンがあると思われますので

ご観覧の際にはご注意ください・・・。

と同時に長丁場でもあります。

第4章。悲劇の2月23日（日）中編。

その2人組を見た元太「おい。見てみるよ。あいつ等もつこんな所からスキーの格好してる

ぜ。
」

其れを聞いた光彦「せっかちですね。あのお2人。
」

コナン

おいおい。幾らなんでも此処からゴーグルまで付ける事は・・・。

すると、ライカ夏美を見て「・・・相棒。
」

夏美「ああ。あの2人・・・なんか、怪しいな。」と呟いていた。

すると2人組の1人がスキー板入れから拳銃を取り出し「動くなッ
！動くとぶっ殺すぞッ！」

其れを聞いたコナン達・・。

バツ・・バスジャック？！

するとその男が拳銃を屋上に向けて発砲し「聞こえねえのか？！」

と続け様にもう1人の男も拳銃を運転手に向けて「運転手。回送に
して都内を適当に回れ！」

そこで信号に引っかかったらてめえのバス会社に連絡するんだ！」

運転手「は・・・はい。」

そして車内がシンとなり・・・。

車内に拳銃を向けた男が「よし！いい子だ！」と続け様に「さて、あんた等が持っている

携帯全部こっちに渡してもらおうか？」そう言い車内を歩き始めて「隠すなよ？隠したら

一生電話に出れねえと思え？」

乗客その男の指示に従い次々と携帯を犯人に渡す。

一方、運転手は「あ、た、田河です。じ、実は・・・」

すると犯人の仲間がパシと電話を取り上げ「たった今あんたん所のバスを占拠した！」

要求は只1つつ！今服役中の宮野川和仁みやのかわかずひとの釈放だッ！もし、出来なけ

れば1時間事に乗客を1人1人ぶつ殺すと伝えておけッ！30分後位にまた連絡するッ！

其れまで準備を整えておけッ！」

コナン。

宮野川和仁・・・。

確か、先月爆弾を作って銀行と宝石店に強盗に入った……。強盗グループの1人で

と同時に元銀行マンでもあり。宝石ブローカーでもあったか……。

んでもって捕まったのは主犯格の宮野川で……。後の3人の仲間連中

は逃亡中……。成る程ね。素人の仲間じゃ宝石等売りさばけないからボスの奪還を試みた

ッう訳ね。

と同時に男「オイッ！其処のお前ッ！さっさと携帯を出せ！」

と乗客の1人である赤井秀一に言った。

赤井咳をしながら「ああ。すみません。携帯もっていないんですよ。

」

男は軽く舌打し夏美達の方に眼をやり「おい！其処の女どもも・・・」

さっさと出せつと言おうとした次の瞬間ゴーグルの中で顔の表情が若干青ざめ

「お、女・・・もしかして・・・お前？」

夏美フツと笑った。

其れを見て「お前?!ま、まさか?!か・・・神奈川県警の・・・」

夏美ニヤと笑い「そッ！鋭いねえ！お兄さん！」と続け様に「私の名は夏美。橘夏美。」

神奈川県警警視の橘雄大の妹さ。と同時にワカバのリーダー兼幹部でもある。」

其れを聞いて男「じゃ・・・こ、この隣にいる女はラ、ライカ・ネアンツ？！」

ライカ「ビンゴ！」

男軽く舌打「神奈川県警視の妹が乗るなんて聞いてねえぞ？！」

夏美「ああ。私等も、聞いていなかった、さ。まさか・・・私等の乗車している

バスが「ジャックされるとはね。」と更に続けて「携帯はね・・・
持ってるけど

どっかにしまい込んでその場所を忘れてしまったのさ。ごめんね。」

と続け様にライカ「なあ。相棒。」

夏美「ん？」

ライカ「タバコ吸っていい？」

夏美苦笑い「おいおい。此処はしばらく我慢だ。バスの中だし・・・
私しやあも本当は

吸いたいが他のお客人方に迷惑かけるからね。もうしばらくだ・・・
相棒。」

ライカため息を付き「了解。」

と続け様に「まあ・・・悪いけど他当たって。」

すると男何かを思い出したのか「おい！確か、宮野川を捕まえたのはお前ん所の

神奈川県警だったな・・・。」

夏美「さあ・・・。私は基本的に警察にはノータッチなんでね・・・。」

男「そうか？此方には神奈川県警と警視庁が合同で捕まえたと聞いているんだがな。」

と続け様に「よし！お前今兄貴の所に携帯貸してやつから連絡し

る！今すぐにッ！」

夏美辺りを見渡し此処は従った方が懸命かと判断し男から携帯を借り神奈川県警に連絡を

いれた。

第4章。悲劇の2月23日（日）中編。完。

第4章。悲劇の2月23日（日）中編。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

次章は今章の後編辺りを書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章と同様にお付き合い下されば

幸いです。

オマケ。

ライカ「いやはや・参ったね。」と続け様に

「次章もどうぞよろしく!」

第5章。悲劇の2月23日（日）後編1。（前書き）

今章は申し訳ありませんがもっぱらオリジナルです

（笑；；）オリジナルが苦手の方はご観覧をお控え

下さる様お願い致します。

尚今章は夏美が兄が居る神奈川県警に連絡する

所から始まります。尚此方は長丁場となりますので

予めご了承下さい。この小説でのコナン達と赤井さん

は、知り合い同士、ではありませんので此方も此方で

ご注意願います。

第5章。悲劇の2月23日（日）後編1。

一方、此処は神奈川県警。

一本の連絡が入った。

刑事「はい！此方神奈川県警！」

夏美「あ。もしもし・・・その声もしかして安須さん？（あず）私・・・
橘です。」

夏美に安須さんと呼ばれた男は安須野川^{あずのかわ}国人^{くにひと}夏美の兄貴分である

片品警部の弟分で捜査一課の警部の1人。

夏美とは「安須さん。」と「夏さん。」と呼び合っほど仲がいい。

安須「ああ。その声は夏さんですね？どうしたんです？」

夏美「あ、あのさ・・・今兄さん居る？居たら替わって欲しいんだけど・・・。」

安須「あ、警視ですね。大変に申し訳ないですが・・・警視庁の目暮警部に呼ばれて

バスジャックされたバス会社に向かわれていらっしやらないんですよ。」

其れを聞いた夏美「え〜！そ、そうなの！？」

安須「は、はい。」と続け様に「夏さん、物凄く慌てていますが・
何かありました？」

夏美犯人が運良く居なくなった事を見はらかって見えない様に「い
や・・実はさ・・。」

安須「え?!バツ・・バスジャックされたバスに今乗っている?
!そ・・其れ本当です

か?!夏さん?!」

夏美頷き「ああ。実はそうなんだよ。昔さ・・宝石強盗や銀行強盗
が神奈川県内とそして

東京都内あつたでしょ？」

安須「ええ。宮野川和仁率いる強盗団・宮野川は我々神奈川県警とそして警視庁で合同で

逮捕し・警視庁に身柄を送りましたけど・って、まさか？！
「夏さん！」

夏美再び頷き「ああ。その、まさかだよ。安須さん。その宮野川の、手下と思われる仲間」

が、ボス奪還の為に、乗り込んで来たと言う訳よ。」

安須「な、何て請った！警視には俺から伝えておきますんで！くれぐれもあまりご無理

そして無茶をなさらないでくださいよ！」

夏美「ああ。了解した。」とそして携帯を切った。

すると夏美に携帯を貸した犯人が戻って来て「で？分かったか？」

夏美携帯をその男に返しながら「残念だったね、うちの兄さんは
‘留守’だったよ。」

犯人「何ッ?！」

と更に続けて「お宅らが占拠したバス会社に案の定居るんだってさ。
知り合いの警部に聞いた

よ。」と更に続けて「其れに・・・うち等^{ワカバ}の連中も密かに、動いてい

る、みたいだし

ね。下手をすりゃ・・ある意味、大変な事、になるかもね？」

と続けてライカ「なあ・・お兄さん。悪いけどタバコ吸っていい？
もう、我慢の限界、なん

だ。」

男軽く舌打し「たく！本当ならこのまま我慢し続けてもらうんだが・
・警察の妹が居るから

しょうがねえ！良いぜ！吸いなよ！ただし・・窓全開にするなよ？」

ライカ「有難う！恩に着るよ！」

そう言い携帯灰皿を取り出しタバコに火を灯した。

そして夏美一般客に「皆さん。申し訳ないッ！こいつヘビースモーカーでね。短時間なら

‘我慢きくんだけど’。どうもね・・・‘長時間’タバコ無しだと堪えてしまうみたいで

本来バスの中は‘禁煙’なんだけど・・・今回はかりはこついう事情申し訳ないッ！」

と申し訳なさそうな顔で謝った。

ライカも申し訳なさそうに一礼した。

と同時にタバコを携帯灰皿に揉み消しながら入れて夏美に「相棒。お前さんも吸う？」

夏美頷き「ああ。」と続け様に男に「お兄さん。悪いね！私も吸わせてもらっよ。」

男「ああ。勝手にしな。」

そしてライカと夏美席入れ替える様にし夏美タバコに火を灯したため息を付きながら

「私と姉さんの‘勘’通りになってしまったかな？」

と小声で呟いた。

その夏美の小声を赤井は透かさずに聞いて夏美をチラッと見ていた。

第5章。悲劇の2月23日（日）後編1。完。

第5章。悲劇の2月23日（日）後編1。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は後半2を書かせて頂く予定です。

尚、次章は再び29巻を元とした話に戻らせて

頂こうと思っております。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美タバコ吸いながら「・・・参ったね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第6章。悲劇の2月23日（日）後編2。（前書き）

今章は最初はオリジナルが入り後半あたりから・・

29巻を管理人多少管理人アレンジさせて頂きまし

た。と共に此方も多少残酷シーンがございます。

残酷シーンが苦手な方のご観覧は大変に申し訳ありま

せんがお勧め出来ません。また、オリジナルが苦手な

方のご観覧もお勧めできません。のでご了承願います。と共に此方

も長丁場でございます。ので此方も

此方でご了承の程お願い申し上げます。

第6章。悲劇の2月23日（日）後編2。

一方、夏美は「誰かに見られている」と勘ずきチラッと視線をその主へとやったが・・

誰一人として「居なかった。」するとライカが「どうした？相棒？」

夏美フツとタバコを吸い続け「・・いや。どうやら「思い過」し、
だった様だ。相棒。」

そう呟いた。

そして男は乗っていた残りの乗客に威嚇し続けていた。

と同時にコナンが電話を警察に知らせようとしたその時・・。

男がコナンに向かって来てコナンを床下に叩き付けた。

其れを見た夏美タバコを携帯灰皿に揉み消しライカと入れ替わる様にしその男の所に来て

「ねえ・・お兄さん。幾らなんでもさっきの、やり過ぎなんじゃないの、？相手は

只の、子供、だよ？」とその男を睨みつけて言った。

男「な、何だと？」そう言い銃口を向け引き金を引こうとしたその時夏美ニヤリと笑い

「、良いのかい、？此处で私じゃあを撃てば神奈川県警の人達そしてワカバも

、恐らく黙っちゃ、居ないだろう。」と更に続けて「この事は、もう、うち（神奈川県警）」

ん所に‘連絡入っているんだ’。このまま‘下手な事’し続けられ
もしかしたら

お宅らのボスが下手すりゃ・・・‘釈放’されないかもね。’

その事を聞いた男は「この女ッ！」そう言い引き金を引いた。

すると案の定夏美の左肩に銃弾が当たってしまった。

ライカ「相棒ッ!!」

と同時に・・・その様子を見て

ん？ちょ、ちよつと・・・。

ま、待てよ？この男が撃ったのって・・・

ゲッ！！

ひ！左肩じゃないかッ！！！！

クソッ！！あの男、面倒な事、してくれる！

と内心凄く焦っていた。

と同時にライカ自身も夏美の左肩には、訳がある事を知っていた。

夏美の左肩は昔心底敬愛していた姉貴分メイランに捨てられる際に銃弾を撃ちつけられた

（今のメイランは広州の女ボス）

事があつたからだ。それ故に夏美は左肩に怪我を負わせられると、過去の事'がどうしても

思い出し下手すれば、暴走しかねない'のだ。

夏美思いつ切りその男を睨みつけた。

男一瞬冷や汗をかく。

と同時に夏美その男に突進して行こうとする。

と続け様に「止めるッ！！相棒ッ！！」

と更に続けて「此処では他の乗客の皆さんに、迷惑が掛かる、辛いだろうが、」

止めておけ。」と宥めた。

夏美若干不服そうに頷きその男をもう1度睨みつけ無言のままライカの隣に戻った。

そして出血している左肩を手で軽くさすった。

と同時に新出が心配そうに「大丈夫ですか？」と夏美に声をかけが無言。

ライカ「あ、気にしないでやってください。こいつの左肩、少々訳ありで、」

負傷されると保々何時も「こんな感じ」になりますから。」

と夏美を見て「この先生。医者みたいだから。後で見てもらおうか？相棒。」

夏美は軽く頷いた。

一方ジョディと赤井はその様子をじっと見ていた。

その一方で此処はバスジャックされたバスの会社。

其処には警視庁の目暮警部と白鳥警部その他警視庁の刑事が数名と

神奈川県警からは梓と夏美の兄である警視でワカバの幹部である雄大。

そして夏美と安須野川警部の兄貴分である片品警部と神奈川県警の刑事数名が

待機して目暮警部はバスジャックされたバスを見張っている高木刑事からの報告を受け

指示を出していた。

目暮「クソ！2人とも拳銃を所持しているって事は迂闊に手が出せ
んって事か。」

一方、雄大は神奈川県警の安須野川警部から電話で「な！何だとッ
？！お、俺の2番目の

妹夏美と相棒であるライカがバスジャックされているバスに乗って
居るだど？！そ、其れ本当

か？！安須さん？！」

安須「は、はい。警視。当のご本人から先程此方に連絡が入りました状況を説明されました。」

た。」

雄大「・・・で？妹達は無事か？」

安須「アレからご連絡はないので・・・あの時からの安否は・・・。」

雄大「・・・そうか。」と続け様に「すまんが。安須さん。もう既にこの事は多分ワカバにも

連絡入っていると思われるが念の為もう1度連絡を入れてくれ！」

安須「了解しました。警視！」

そう言い電話を置いた。

雄大「クソッ！！俺の妹達に何かしたら・・・只じゃ済まさんからな！犯人共！！」

片品「・・・雄大。」

因みに片品警部と雄大は幼馴染であると共に信頼しあう友人同士。

雄大「・・・片品。夏美達があのだジャックされたバスに乗っているらしい。」

その事を聞いた片品驚き「何？！其れ本当か？！雄大！」

雄大悔しそうに頷き「ああ。考えたくもないが・・・さっき安須さんから報告連絡があつた

よ。
」

そして、目暮警部に上層部から宮野川和仁の釈放命令があつた事を知らせた白鳥警部が

雄大達の所に来て「橘警視。片品警部。」

雄大「はい。何でしょうか？白鳥警部。」

片品警部白鳥警部の方に体を向けた。

白鳥「我々警視庁の上層部の判断が下りました！人質になっている乗客の身の安全を最優先

とりあえず被疑者の要求通りに拘置中の宮野川和仁を釈放せよとの事です。」

雄大「分かりました。」

片品ため息を付き「致し方ありませんな。」

と同時に白鳥「これは目暮警部に話したのですが・・・。」

と続け様に目暮警部との会話内容を雄大達に話した。

その事を聞いた雄大「目暮警部は我々警察を『巻く』何かの策があるかもしれない。」

とそうおっしゃったんですね?」

白鳥「はい。」

すると片品「・・・雄大。」

雄大「ん？何だ？片品。」

片品「俺も目暮警部の意見に同意見だ。奴等は俺等『警察』の煙を巻く逃走手段を

何らかしら用意しているかも知れねえ。」

雄大頷き「ああ。『そうだな。』」

と続け様に心の中で。

・
・
・夏美。

・
・ライカ。

どうか無事で居てくれ！

そう心の中で祈った。

第6章。悲劇の2月23日（日）後編2。完。

第6章。悲劇の2月23日（日）後編2。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございました。

バスジャック編は後しばらく続く予定なのでご理解の程宜しくお願い致します。

次章は多分29巻の危険信号辺りから一応アレンジさせて頂いた物を書かせて頂く予定です（後編3）

オマケ。

片品「・・・雄大。」と続け様に「皆さん。改めまして

神奈川県警の警部の片品です。次章もどうぞ宜しくお

願い致します。」

第7章。悲劇の2月23日（日）後編3。（前書き）

今章もオリジナルから入り・・・29巻の個人的な

アレンジ編です。此方も長丁場になっていますので

予めご了承下さい。

第7章。悲劇の2月23日（日）後編3。

一方此処は再び都内を走行中のバスジャックされたバスの中。

犯人の仲間が「フフツ。そうか。釈放する気になったか。」と続
け様に「よし！それじゃ

宮野川に伝えろ1時間後に此方に連絡する様にな。奴の口から安全
な場所まで来れた

かどうかを確認した後にはまず此方の乗客の人質4人を解放する。何
？神奈川県警警視の妹の声

を聞かせるだと？フン！ま良い！」と続け様に「おい！神奈川県警
の警視の妹は誰だ？！」

夏美無言のまま席をたった。

仲間「ようし！そのまま前に来いッ！お前の兄貴と話をさせてやる
！」

そう言い夏美只無言のまま前に行き犯人の仲間から電話を受け取り
「どうも。」

とそっけない声で犯人の仲間に礼を言い電話に出た「はい。夏美で
す。」

雄大「夏美か？俺だ！」

夏美その声を聞き一先ず安堵する「兄さん。」

雄大「無事か？」

夏美「ああ。何とかね。私じゃあ等は一先ず、大丈夫だからさ、心配
しないで！」

雄大「・・・そうか。お前のその声を聞いて一先ず、安心したよ。」

夏美「・・・兄さん。この後の『仕事』も頑張ってね。」

雄大「ああ。」そう言い電話を犯人の仲間に戻し「良いか?! くれぐれも下手な真似

すんじゃねえぞ?!」そう言い電話を切った。

するともう1人の男がスキー袋を2つ縦に並べた。

コナン

『縦に並べたスキー袋』? 此れってもしかして・・・?

そう確認しようとしたその時再び男がやって来て「また『お前か』?」

と続け様に「そんなに早く、殺されてえ、なら、お望み通り、に
てやるぜえ？」

そう言いコナンに銃口を向けた。

すると光彦達が「コッコナン君?!」

一方ジョディはその様子を冷ややかな目で見ていた。

と同時に新出がコナンの前に出て「止めてくださいッ!!只の、子
供の悪戯じゃないですか、」

!!其れにあなた方のご要求は既に通ったはず!!此処で乗客を1
人でも殺せばあなた方の

計画通りには進まないじゃないですか?!」

すると男銃口を新出に向けて「何だと?この青二才目!」

そして仲間が「止める！」

と同時に男に小声で「もし弾が^{たま}それて、アレ、にぶつかったりしたらどうすんだ？」

男若干焦りながら「あ・・・悪い。」

と仲間はコナン達を見て「ほら！さっさとお前等席に戻れ。」

新出「は、はい。」

すると、コナン

‘アレ、’に当たったら・・・って事はもしかして・・・このスキー袋の中身は

爆弾か？！

これを‘使って’、奴等が何するかどうかはまだ分からねえが・・・今ので‘はつきり分かった’

ぜ！夏美達を除く後ろの3人が俺の‘行動を’、奴等に知らせた‘仲間’がいるって事が。

だが・・・どうにかして‘その仲間を’、此処から割りださねえと迂闊に手が出せねえ！

と続け様に真弓に「おい。碇・・・お前も何んか‘知恵’、出せよ。」

コナンの呼びかけにもビクともしないで其れよりかは凄く‘怯えていた’。

コナン「おい・・・。」

真弓

ドックン！

ドックン！！

な、何だ？！

何なんだ？！

この突き刺さるような

ドクン!!

‘プレッシャー!’

そして・・・ ‘あの時と同じ威圧感’!!

や、やべえ!! 居る!!

‘間違いない’!!

ドクン!

ドクン!

このバスの中に・・・

‘あの女が’！！

やっぱ‘組織の人間か’？！

私じゃあを‘追って来たのか’？！

ドクン！！

ドクン！！

それとも‘偶然’か？！

ドクン！！

ドクン！！

もし・・・こんな所で私しやあの『正体』が『ばれてしまったら・・・』

『あの時の毒薬で死んだはずの水野渚』だって事が『ばれたら・・・』。

ドクン！！

私しやあと一緒に乗っていた博士達や・・・

夏美さん達も・・・

ドクン！！

ドクン！！

そして勿論・・・

私しやあの『相棒』も確実に・・・。

ドックン!!

ドックン!!

た・・頼む!!

頼むから!!

どうか、見付からなくてくれ!!

ドックン!!

ドックン!!

そしてジョディが微笑みながら「無茶は駄目ね。クール・キッド！
グットチャンス直ぐに來ま

ーす!!」

一瞬真弓がビクと体を動かした。

ジヨディ真弓を見て「ohー！怖がらなくても大丈夫！私達直ぐに助かります！」

と続け様に「緑頭巾ちゃんお名前は？」

コナン「あ、こ、この子は・・・。」

すると真弓コナンの手を強く握り締めた。

コナン

・・・え？

ジヨディ「What's your name Little Green Reading Hood?」(ホワッツ ユアネームリトル

グリーンライディングフード？）（名前教えてくれる？緑頭巾ちゃん？）」

コナン「たまたま・・・居合わせた知らない子だよ」。凄く、怖がっているから、

そっとしておいて上げて。」

その事を聞いたジョディ「Oh」ごめんなさい。」

すると男が「おい！其処さっきから何やってるんだ！」

その男をジョディが一瞬冷やかな目で見たと同時に新出が「ジョディ先生。彼等をあまり

刺激させないで、下さい。」

ジョディにこやかに「oh！ yes！」とコナンを見て「Let's talk Letter・・・。」

（レック・トークレイター　またね。）

コナン「あ、うん・・・」

そしてジョディ必死でコナンの手を握っている真弓の手を、不信そうに見ていた。

第7章。悲劇の2月23日（日）後編3。完。

第7章。悲劇の2月23日(日)後編3。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

と共にまだこのタイトルは‘続く予定’なので
今しばらくまたお付き合い下されば幸いです。

オマケ

哀「・・・碇さん？」と続け様に

「今章もどつぞ宜しくね。」

第8章。悲劇の2月23日（日）後編4。（前書き）

今章は前章の後編4です。

多少残酷なシーン？を含むかもしれません。

のでご観覧の際ご注意願います。

此方も此方で長丁場です。

第8章。悲劇の2月23日（日）後編4。

コナンその真弓の様子を見て。

お、おい！

まさか？！まさか・・・？！居るのか？？

このバスの中に、奴等（黒ずくめの）仲間が、？！

でも今は、この中から夏美達以外のこいつ等の仲間をあぶりだすのが先だ・・・。

そいつを見つけ出さないと、黒ずくめ所、ではなくなっちまう。

怪しいのは・・・夏美達を除くあの後ろの3人組。

一番、怪しいのは、さっきから咳をしているあのニット帽の男。

乗客、赤井秀一。

でも・・・咳なら博士もしている。そんなに音には違いがない。

音と言えばガムをかんでいるあの女も出しているけど・・・

音としては咳の方が大きい・・・。

乗客、富野美晴。

それに・・・奴等は運転席の所に居る。あそこからガムの音が聞こえる訳が無い。

残るのはあの補聴器をつけているあの伯父さん。

乗客、町田安彦。

あの補聴器がワイヤレスマイクなら、こっそりあの2人に伝える事が可能だけど・・

あの2人自身もマイク着けていないし・・寧ろそんな事したら両脇に居る乗客の2人に

怪しまれてしまう。

あの2人が絶えず見ているのはあのバックミラー位だしね。

すると男が「おい！ジジイ！！」

コナン「え？」

男「何ゴソゴソやっているんだっ?！」

博士「あ・・いや。咳止めの薬を・・。」

すると夏美「別に良いんじゃない? 咳止めの薬位。こんな長時間、箱の中で、閉じ込められて

居たらそりゃ、誰だって動かしたく、なるさ。」と男を睨みつけながら言った。

ライカその夏美の様子を見て

ハハ・・。

相棒あの様子だと、機嫌悪いかな、?

と呟いていた。

男「何だと？この小娘？」

そう言い銃口を夏美に向けたとその時夏美は物凄い形相で一睨みした。

男はその夏美の一睨みで一瞬引き軽く舌打しその場を素早く後にし仲間の下に戻って行った。

コナン

・・スゲ。

あの様子から見るとそうとう、機嫌、悪いな。

と同時に

また・・教えやがった！

一体どうやって教えたんだと言うんだ？

すると男の仲間の携帯が鳴り

「おう！お待ちしていましたよ！宮野川さん。どうです？そっちの様子は？」

公衆電話で宮野川息切れしながら「ああ。問題ない、警察は巻いたよ。」

男の仲間「じゃ・・・4日後何時もの場所で落ち合いましょっや!」

そう言い携帯を切った。

第8章。悲劇の2月23日(日)後編4。完。

第8章。悲劇の2月23日（日）後編4。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

次章は解決編を書かせて頂く予定となっております。

が・・もしかすると変更ありかもしれません

その時は次章の冒頭部分でお知らせ致したいと

思います。其れでは次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカ「次章もどうぞ宜しく！」

第9章。悲劇の2月23日（日）最終後編1。（前書き）

今章はバスジャックの最終編として書かせて頂きましたし

た。尚・・・最終後編と題させて頂きましたので

番号は一応あえて1番と戻させて頂きました。

のでご了承願います。と共に此方も長丁場です。

第9章。悲劇の2月23日（日）最終後編1。

アレから犯人の男の仲間が携帯で宮野川に連絡を取った後運転手に

「よし！運転手！そのまま首都高乗って中央道路に入ってもらおうか。」

そしてバスは都内から首都高に乗って中央道路に入る時に・

少女「あ！」

少女がバスのからの追い風により持っていた風船を手放してしまった。

犯人の仲間の男「そして、小仏トンネルに入ったらスピードを落すんだ。へへッ。

心配するなよ。ちゃんと「約束通り」乗客は解放してやつからよ！」

コナンそして、夏美、ライカ窓に映っている風船を見て・

夏美とライカ。

！！

こっ、これってまさかっ？！

一方コナンは何か分かったかの様に・・。

ニヤリと笑い

成る程、そう言う事か'。

そして、犯人の男「おい！！メガネを掛けた青二才の男！そして奥にいる風邪を引いている

男！2人とも前に来いッ！」

そして男の仲間「ほら。どうした？早く来なよ。」

犯人「殺しやしねえから安心しな。」

そしてコナン再びニヤリ。

「読めたぜ！」お前等のもう1人の「仲間」の事もそして・・・

「逃走手段もな」！

そしてライカ小声で「おい！相棒。此れって・・・」

夏美軽く頷き小声で返しながら「ああ！「その通りだ」。相棒。奴等は多分うち等（乗客）」

を、解放するつもりなんか、最初ッから思っていなかっただろうさ。
」

其れを聞いたライカは若干驚きながら小声で「お・・おい。どうするんだよ?!」

夏美小声換えして「慌てるな。どうやら私じゃあ等の、小さな相棒」が「助かる術」

を、見つけてくれた様だからさ。」とコナンを見て軽くフツと笑
い言った。

ライカ「・・成る程。」

夏美。

・・頼んだぜ!新!

と心の中で呟いていた。

一方コナンは探偵手帳を取り出しジヨディの足元に投付けた。

そして探偵手帳がジヨディの足元に当たった。

ジヨディ「!!」

手帳を拾いながら

手帳？

そしてページをめくり「!!」

その姿を赤井がチラッと横目で見た後前に向かう。

新出も向かった。

すると手帳にはこう書いてあった。

‘口紅持つてる’？

そしてジョディはバックから口紅を取り出し犯人達に見えない様にコナンの元に投付けた。

コナンジョディから口紅を受け取り

よーし！！

そして懷から探偵バッチを取り出し元太達を見て・・。

後は探偵バッチであいつ等に！！

コナン咳払いをわざとした。

その一方でその様子を、闇の目、が見ていた。

ベルモット

Where can a lipstick bring us?

(ホエア キャン ア リップステック ブリング アス

さあ・・・その口紅一本でどうする気?)

show me your magic (ショウ ミー ユア
マジック。 ‘お手並み拝見とさせて頂くわよ。’)

フフフ・・・。

Cool guy・・・。

一方その様子を夏美達も見ていた。

ライカ・・・。

口紅?

あいつ、何するんだ、？

夏美。

フム。

ん？

この、感じ、。

ハハハッ。

あの女_{ビョウ}

‘誰かに変装してこの中にいるね’。

そして・・・新の腕前を見様としている。

さあ・・・。私じゃあ等の‘小さな相棒（新）’，

頼むよ！この‘悪夢のお祭り’もソロソロ End ！！にね！導
いてくれよ！

一方外では警視庁の佐藤刑事が車でバスを追跡していた。

第9章。悲劇の2月23日（日）最終後編1。完。

第9章。悲劇の2月23日（日）最終後編1。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の最終後編2と題しまして書かせて

頂きたいと思います。

其れでは次章も今章同様にお付き合い頂ければ幸いです。

オマケ。

哀「・・・次章もどうぞ宜しくね。」

第10章。悲劇の2月23日（日）最終後編2。（前書き）

今章は前章の続きを書かせて頂きました。

此方も長丁場となっております。のでご了承下さい。

第10章。悲劇の2月23日（日）最終後編2。

すると佐藤刑事は無線で「此方佐藤！ジャックされたバスは、現在中央道を大月方面に

向かって走行中！まもなく小仏トンネルです！」

目暮「そのまま追跡を続けろ！くれぐれも見失うんじゃないぞ！」

佐藤「ハッ！」

一方此処はバス会社。

目暮「よし！！バスのガソリンも残りわずかだ！奴等は恐らく給油と同時に

乗客を4人解放する！山梨県警に応援を要請し、バスが立ち寄りそうなPA（パーキングエリ

ア）にすべての捜査員を配置させろ！ドアが開いた瞬間が突入する

絶好のチャンスだ！」

捜査員一同「ハッ！！」

と続け様に「橘警視。」

雄大「はい。目暮警部。」

目暮「神奈川県警の捜査員も配置に着くようお願いできますかな？」

雄大頷き「もちろんです！目暮警部！早速配置に着かせましょう！」

と続け様に目暮「片品警部はどちらに？」

雄大「片品はアレから現場に急行してもらいました。今は恐らく・・・
小仏トンネル前でしょ

う。」と続け様に無線を取り出し片品に着いて行った捜査員に連絡を入れた。

雄大「山梨方面に向かっている神奈川県警捜査員に告ぐ！！たった今警視庁の目暮警部から

バスが寄りそうなすべてのPAに捜査員を配置！！との要請があった！そして今さっき

警視庁が山梨県警に応援を要請！山梨県警と警視庁との連携をする様に！」

神奈川県警捜査員「ハッ！橘警視！」

そして、バス会社に佐藤刑事から無線が入った。

「警部！バスがスピードを落しました！」

目暮「何?!」

「此れよりバスは小仏トンネルに入ります。」

そして、バスは小仏トンネルに入った。

すると犯人の仲間「ほら!お前等このスキーウェアに着替えて床に座れ。」

犯人「このゴーグルと帽子も忘れるなよ。」と続け様に「少しでも俺達の身代わりになって

‘時間稼ぎ’をしてもらうんだよ。釈放された乗客の振りをした俺達が降りて逃げる間を

な。」と更に続けて「心配しなくても‘其処の乗客達’がお前達が

‘犯人’じゃないって

事を証言してくれるさ。」

そして犯人の仲間が運転手に銃口を付き付け「まあ・・・俺達が、無事に逃げられるかどうか、」

は運転手！‘あんた次第だ’！俺達がバスから降りた後そのままバスを走らせ警察の目を

バスに向ける！」と更に続けて歩きながら「もちろん。ちゃんと指示に従ってもらう為に」

‘人質’を1人取らせてもらおう。」そして奥に座っているガムを噛んでいる女性に

「おい！其処の後ろでガムを噛んでいる女！」

富野「え？」

犯人の仲間「お前だ！前に来な！」

そして女性前に向かって歩き出した。

第10章。悲劇の2月23日（日）最終後編2。完。

第10章。悲劇の2月23日（日）最終後編2。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は多分ではありますが最終後編完を書かせ

て頂く予定です。其れでは次章も今章同様に

お付き合い下されば幸いです。

オマケ。

夏美「・・・後もう少しの‘辛抱’か。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくね!」

第11章。悲劇の2月23日（日）最終後編3・（前書き）

今章は前章の続きです。

と同時に今章で終わらすつもりだったんですが・

終われませんでした（汗）

恐らく次章でこの章は完結？する予定です。

此方も此方で長丁場なのでご了承下さい。

第11章。悲劇の2月23日（日）最終後編3・

犯人の仲間「良いか！？トンネルを出たらスピードを上げ後ろの警^サ察の車を引き離し

てからスピードを落してバスを止めろ！俺達が降りた後ガソリンが無くなるまで突っ走れ！」

そして人質の頭に銃口を付きつけ「この女の頭をぶっ飛ばされたく無ければな！」

富野怯えた表情で「ひッ！」

運転手「はっ・・・はい!!！」

コナン其れを見て・・・。

いやッ！違うッ！彼女は「人質」じゃない！

‘ 奴等の仲間だ！ ’

思った通り……。仲間3人でこのバスから降りた後口封じに爆弾を仕掛けて乗客全員を

‘ 殺す ’ つもりだな。そう……。奴等は本当に解放された人質に成りすましそして……

別に待機していた‘ もう1人の仲間 ’ と合流しバスから降りて警察に‘ 自分達 ’ の犯人像と

‘ まったく違う犯人像を ’ 口をそろえて証言するつもりだろ。恐らく警察は犯人は2人組

だと思っているだろうし、
「解放される前に犯人と乗客がもめていた。」
「 と言え、ば、」

‘ 何らかのアクシデントで爆弾が爆発し、犯人は乗客と共に爆死したと思わせられる ’。

つまり、爆破後にバスの中から発見されたスキーウェアを着た風邪を引いている男性と

新出先生の‘死体’を犯人だと錯覚される事が出来るって訳だ！

スキーウェアを2人に着せるのをトンネル内にしたのは外の様子を見られたく無かったんだ

ろうが……。この暗闇はこっちにとって‘好都合’だぜ。

そして探偵団バッチの音を入れた。

すると元太達が一斉に気づきコナン耳に当てる様に指示する。

そしてコナン小声で「良いか？此れから俺の言う通りに行動するんだ！大丈夫！」

車内は暗いし、奴等は計画の成功を確信して‘油断しきっている’！

と続け様に「トンネルから出た後が‘勝負だぜ’！」

そして、バスはトンネルから出た。

犯人の仲間「よし！バスのスピードを上げろ！」と続け様に「
妙なまねするなよ」？

ちゃんと指示に従えば、助かるんだからな。」

するとコナン「よく言うよ！どうせ、殺しちゃっくせに」！

犯人「な？！」

コナン「だってさ。顔を、見せた、と言う事はそう言う事なんですよ？

早くしないと皆、殺されちゃうよ、！」と続け様に「この、爆弾で、！」

爆弾が入っているスキー袋を博士と共に持ちながら言った。

すると犯人「こっ……このガキッ！！黙らせてやるッ！」とコナンに銃口を向けた。

仲間慌てて「おい！馬鹿！撃つなよ！」

犯人「ん？何だ？あの、赤い落書き、は？」

コナン「早くッ！！」

すると運転手入りロドアにあるミラーを確認し「STOP?!！」

そして急いでブレーキを踏みつけた。

と同時にバスは物凄い勢いで横になった。

犯人「おわ！」

歩美町田の片腕を掴み「おじさん！こっちよ！」

町田「え？」

そして元太と光彦は残りのスキー袋に入っている爆弾を両腕で掴み
「離すなよ！光彦ッ！」

光彦「分かってますッ！」

そしてバスは止まり犯人2人組はその場で倒れ込みコナン素早く前
に向かう犯人の仲間

拳銃を持ち「・・・この。」そう銃口をコナンに向け様としそしてその後ろを赤井が殴りかかる

うとした次の瞬間コナンが素早く麻酔銃を発射した。

犯人の仲間はその場で寝てしまう。

赤井其れを見て驚いていた。

と同時にコナン新出を見て「新出先生ッ！その女の両腕を捕まえて
！」

新出「え？」

コナン更に続けて「その女が持っている腕時計は、起爆装置、なんだッ！」

そして犯人「こ……このガキな舐めたマネを！」

するとジョディが行き成り膝蹴りを犯人の腹に食らわした。

コナンは其れを見て驚いていた。

と同時にジョディ犯人に馬乗りになって……

「Ohh。ごめんなさい。急ブレーキでバランスが。」

犯人「ふっ……ふざけるな。」そう言いジョディに向かって引き金を引こうとしたその時

「あ、あれ？引き金が……」

そしてジョディ銃を持ちながら「馬鹿ね。銃はトレカフは撃鉄を軽く押して

あげると中間で安全装置セイフティが掛かるのよ。此れ位バスジャックする前に

‘勉強しておきなさい’。」とウィンクしながら言った。

と続け様に犯人「な・・・何なんだ?!何者なんだ?!あんだ?!」

するとジョディ前かがみになって「Shhhhh・・・。(シー)」

と続け様に「It's a big secret. (イッツ
ア ビック シークレット。秘密よ秘密!)

I'm sorry! I can't tell you!
(アイム ソーリー アイキャンテルユー。

残念だけど教えられないわ!)」と更に続けて「A secret
makes a woman woman・・・。

（ア シークレット メイクス ア ウーマン ウーマン。女は秘密を着飾って美しく

なるんだから。」と犯人から拳銃を取り上げてにこやかに「Oh
〜！降参ですねえ！」

コナン「？」

すると奥の2番目の席から1人の男が立ち上がった。と同時に夏美はその男の右肩を軽く叩き

「悪いね」。もう、Game Over！だ！さかえたみつお栄田光男さん。。

いや。。こう呼んだ方が良いかな？みやのかわゆきふみ宮野川幸文さん？」

男その名を呼ばれて驚き「な。。何者だ？あんた？何で俺の本名を？」

夏美ニヤリと笑い「お前さん……。私しやあの顔、忘れた？」

幸文夏美の顔を見て更に驚き「な……。お、お前は……。かつ、神奈川県警の警視た、橘雄大の

い、妹のた、橘夏美ッ！！！」

夏美「そ！お前さんの兄さんが、昔起こした横浜の事件では世話になったね。」

と続け様に「もうじき、迎えが来る、観念するんだね。」そう言い前に兄から何らかしら

貰ったと思われる手錠を懐からだし……。「宮野川幸文バスジャック共同犯で逮捕する。」

そう言い手錠を掛けた。

そして。新出先生に両手を持たれていた富野が時計に仕掛けてあった起爆装置を見て慌てて

「あ・・・あ。に、逃げなきゃ！早く逃げなきゃ！！」

新出「え？」

富野「い・・・今の急ブレーキで時計をぶつけてしまって起爆装置が動き出しちゃったのよー！

爆発まで・・・後20秒も無いわよー！」

其れを聞いたコナン達は更に驚いていた。

第11章。悲劇の2月23日（日）最終後編3。完。

第11章。悲劇の2月23日（日）最終後編3・（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は恐らく今章も最終章を迎えるかと思えます。其れでは、次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカ「次章も宜しくね！」

第12章。悲劇の2月23日（日）最終後編4。（前書き）

今章でバスジャック編も終わりです。

此れはオリジナルが多少？入っている恐れもございま

す。と同時に此方は前々章よりかなり長丁場に

なっておりますのでそちらもご了承ください。

（夏美達と赤井さんは知り合い同士です）

第12章。悲劇の2月23日（日）最終後編4。

一方、バスの外側と言つと・・・。

バスの周りを警視庁の佐藤刑事と千葉刑事・・・そしてその他の捜査員。

と神奈川県警の片品警部と後から合流した^{ひろすえみすず}広末美鈴警部と

数人の捜査員がバスの周りを待機。

佐藤無線で「バスは急停車した模様です。警部！突入しますか？」

目暮「いや・・・応援が来るまで待て。」

一方広末「ねえ。片品君。私達はどうする？」

片品「広末の姉さん^{あね}。俺達も待ちましょう。中に・・・夏美の奴も、

ワカバ'の

相棒と共に'巻き込まれている'見たいですから。」

其れを聞いた広末「え？な、なっちゃんが？！」

片品頷いた。

すると、バスの入り口のドアが開き一斉に乗客が慌てて降りてきた。

佐藤驚いた顔してそしてコナンも乗客の中から出て来て「コ・・・コナン君？！」

どうどうしたの？！」

コナン「爆弾が後20秒足らずで爆発するんだ!!」

千葉「ええ〜!?!」

そして、佐藤「私はトンネル側を止めるから、千葉君は反対車線を
!後の人は乗客の皆さん

をバスから遠ざけて!!急いでッ!

千葉「はっ!はい!!」

そして片品コナンに急いで近寄ると「コナン坊!!」

コナン「あ!片品警部ッ!」

片品「雄大ん所の妹は無事か?!」

コナン頷きながら「うん!大丈夫だよ!」と続け様に「今からライカ姉ちゃんと共に

夏美姉ちゃんも降りてくるよ!」

そして夏美宮野川の弟である幸人を連行しながらライカと共にバスから降りて来た。

片品その様子を見て「な、夏美ッ!!其れにライカッ!!」

夏美「あ・・片品の兄^{あに}さん。」と続け様に片品に続く広末と神奈川
県警の捜査官を見

て「と、広^{ねえ}末姉さんに……。神奈川県警の皆。」

捜査員の1人である緒川明菜^{おがわあきな}が夏美の所にやって来て

「夏お嬢！お怪我は？！」

夏美「いや……。犯人の男に軽く左肩に撃たれた位。後は、大丈夫だよ。明さん（あき）。」

と笑いながら言った。

緒川「そ、そうですか……。」と続け様に「でも、念^{ねん}の為^{ため}、病院に行かれた方が……。」

夏美フツと笑い「いや・・心配いらんよ。どうせ、過去の傷が、痛み出した、だけ」

だからさ。」と同時に宮野川の弟を片品の前に出し「所で、はい。片品の兄さん。」

此れ・・「お土産」。」

片品驚いて「こ、こいつ宮野川の弟じゃないか?! どうしてこいつが?!」

ライカタバコに火を灯し「こいつあのバスジャック犯の4人目の、仲間だったんですよ」

片品さん。」

片品「そうか。で? こいつもあの、連中と、最後に、逃亡、しようとしていたのか・・。」

其れを聞いて夏美ニヤリと笑い「そう言う事！」と続け様に「とりあえず手錠は掛けといたか

ら後は「任せるね」。

片品夏美から宮野川弟を引き取り「ああ。了解した。」と続け様に「まあ・・・今回は

都内で起きた事件だし、一先ずお前の兄貴と相談して警視庁に身柄を一時期引き渡した

後兄弟共に昔の横浜^{ハマ}の事件の事についてもう1度聞いてみるか。」

そう言い「ほらッ！歩け！宮野川幸人！」と更に続けて「今回はうちの警視の妹達も

「巻き込んだんだ」！警視庁から身柄をこちらに戻された後・・・うちの警視から

‘ たっぷりと絞られてもらっからな ’ ! 覚悟しておけッ! 」

幸人「は、はい。」

そう言いとぼとぼと歩き始めた。

と同時に広末夏美達を見て「でも、無事で何よりだったわ。なっちゃん達。」

警視には私から連絡入れとくから。」

夏美「有難う。広末姉さん。」と続け様に「私等も事情聴取受けなきゃ駄目? 」

と苦笑いした。

広末も苦笑い返して「・・・一応ね。貴女達も、被害者、だから。警察としてはね・・・。」

夏美「そっか。で？警視庁？それとも・・・神奈川県警？」

広末「とりあえず、警視庁かな？神奈川県警（うちん所）に着いては多分・・・警視から」

直々にご連絡が入るかもしれないけど・・・。」

夏美「了解。」と続け様に「あ？アレ？そう言えば、彼女、（渚）は？」

ライカタバコ吸いながら「ん？そう言えば居ないね。」

と続け様に「お、おい！相棒！今・・・コナンの奴が焦りながらバスの中戻っていったぞ！」

夏美「何ッ！！」

じゃ・・・まさか？！

渚？！

まだ・・・あの中に？！

一方再び此処はバスの中。

真弓（渚）

そうさ。此れが最善策だ。

例え、この場で助かっても嫌でも事情聴取の時に、あの女、と、鉢合わせ、になつて

しまふ。このまま私しやあが、消えてしまえば、組織との接点も・・一応だけど

‘消滅’する事になる。

分かつていたのにな・・。あの時ジンに、毒薬を、飲まされ体が小さくなつた時から・・

もう既に私しやあの、居場所が、無かつたつて事を・・。

分かっていたのにな・・・。

私じゃあつて馬鹿だよな。

馬鹿だよな・・・。

兄さん。

一瞬昔事故に巻き込まれ・・・今は亡き実の兄水野裕史みづのひろしの事を思い出していた。

すると拳銃の音が鳴り後ろの窓が割られた音がした。

真弓「え？」そして走る足音が聞こえコナンの手が真弓の腕を掴み真弓再び驚きながら

「あ・・。」そして後ろ窓からコナンが真弓を抱きかかえバスから脱出した。

コナン達は地面に転げ落ちた。

すると一台の車がコナン達の前に止まり「コ、コナン君?!」と運転席から

警視庁の高木刑事が出て来た。

そして先に避難していた博士を始め元太達が走ってコナン達に近づいて来た。

元太「コナン!」

歩美「コナンくん！」

そしてコナン真弓を支えながら「この子、ケガしているんだッ！博士と皆を連れて病院

に連れて行つて！」

高木「え？」

コナン「事情聴取は僕一人で受けるからさ！」

高木戸惑いながらも「あ、ああ。」

そして高木「よつと！」そう言い真弓を抱きかかえた。

するとコナン「逃げるなよ」。相棒。」と更に続けて「自分の運命から逃げんじゃねえ

ぞ、！」

真弓は只黙って聞いていた。

一方高木をはじめ元太達は「？」となっていた。

コナン「さあ！早く病院にッ！」

高木頷き車に急いで向かった。

コナンは高木刑事の車を見送って居た。

そしてジョディ「Oh〜クール・キッド！拳銃でガラスを割って女の子を助け出す

何てまるでジェームズ・ボンドです！」

其れを聞いたコナン「007は先生の方だよ！犯人に足をわざと引っ掛けて謝る振りをしてトレカ

フの安全装置セイフティを入れたんでしょ？」

ジョディ両手を組みながら笑顔で「Oh！ yes！映画みたいに上手く出来ました！」

コナン横目で「・・・ハハハッ。」

と更に続けてジョディ「でも、良く分かりましたねー？彼女がバスジャッカーの仲間だと。」

コナン「風船、だよ。」

其れを聞いたジョディ「風船、？」

コナン「彼女は風船ガムを利用して乗客の中に不審な行動をしている乗客の数を仲間に

教えていたんだ。」と更に続けて「風船ガムが割れてその口についたガムを取る左、右と

その指の数で不審な行動をしていた乗客の位置までね・・・。」

ジョディ「じゃーどーして、彼女の時計が起爆装置だと分かったんですかー？」

コナン「あの人　1時のままの時計をしていたから『何となくね』。」

とジョディ悔しそうな顔して「でも、悔しいです！犯人のボスに『逃げられちゃいました

「！」

コナン両手を後ろに回しながら「ああそれなら大丈夫！」

夏美「策も無しに・・・牢屋に入れた悪い奴を警察がそう簡単に逃がしやしないさ。」

きつと・・・また牢獄にぶち込んでくれるだろうさ。」

コナン「あ！夏美姉ちゃん！」

夏美タバコに火を灯し微笑んで「よっ！コナン！今回はお互いある意味『災難』だったな。」

コナン苦笑いし「そ、そうだね。」

すると佐藤「乗客の皆さん！これから事情聴取があるので車に乗って下さい！」

コナン「あ、僕達も行かなきゃ！」と続け様に「夏美姉ちゃん達も来るの？」

夏美苦笑いし「ああ。兄さん所は、どうなるか分からん、けど・・さつきさ広末姉さんに

警視庁の事情聴取は一応、受けておいて、って言われたもんでな。」

コナン「そっか。」

と続け様にジョディ心配そうな顔して「傷だらけですけど・・大丈夫ですかー？」

コナン笑いながら「平気！平気ッ！」

そして新出がコナンの腕を掴みコナンの顔に痛みが走る。

新出コナンの腕を見て「やっぱり！こんな大怪我してるじゃないか！むちゃくちゃだな！」

君は・・・。」

コナン「あ、新出先生・・・。」

新出「事情聴取は治療受けてからだよ？良いね？」

コナン「あ、う・・・うん。」

と続け様に新出「後、夏美さんですよ？先程犯人に左肩撃たれてその治療も・・・。」

夏美タバコを吸いながらフツと笑い「先生。私は大丈夫ですよ。此れは、どうせ」

「昔の傷」が疼いただけですから……。コナンだけを見てやってください。」

其れを聞いて新出「本当に、大丈夫ですか？」

夏美「ええ。ご心配お掛けしました。」

その様子を赤井とジヨディが無言のまま見つめていた。

一方、此処は高木刑事の車

光彦「い、痛くないんですか？真弓さん？」

歩美「足からいっぱい血が出てるよ……。」

真弓「フツと笑い」「大丈夫……。此れ「私しやあの血」じゃないから……。」

歩美「え？」

真弓

そうさ……。

「この血」は私しやあをあの場所から遠ざける為に付けられた「相棒の血」

どうやら・・・また大きな借りを作っちゃったようだね・・・。

相棒（新一）。

一方此处は再びバスジャック現場・・・。

佐藤「早く乗って下さい！」

赤井後ろを向き無線でカチと鳴らし「2月23日（日）『不測の事態により追尾続行不能』」

ターゲット
『標的』は現れず・・・後日また改めて調査を再開する！以上！』

力子。

一方夏美はワカバに連絡を入れた。

その様子を赤井密かに見ていた。

夏美「ええ・・・。もう、『災難』でしたよ。まさか私と相棒が乗っているバスが

ジャックされるとは夢にも思っていないませんでしたからね。はい。此れから警視庁の

事情聴取を受けてきます。帰りは恐らく其れからだと・・・。はい。申し訳ありません。

ご心配をお掛けしました。あ、後冴子さんに頼まれた件に関しましては雷外経由で冴子さんに

送っておきましたので。では・失礼します。兄様。^{あに}「そして携帯を切った。」

すると赤井が夏美に寄って来た。

夏美赤井に気づき「お疲れ様でした」。

赤井「ああ。お疲れ」。「と続け様に「まさか・お前とライカが乗っていたとは

な・。」

夏美タバコ吸いながら「ええ・。今日はオフだったんで、ちよいと都内めぐりを

相棒しようと思ったのですが・「予想外」の事も出て来てしまつて・。」

と続けて「秀さんは「お仕事」で?」

赤井頷き「ああ。だが、不測の事態に見舞われた為断念したよ。」

そしてライカ「おーい！相棒ッ！ソロソロ事情聴取ッ！」

夏美携帯灰皿を取り出してタバコを揉み消し「ああ！了解したッ！相棒ッ！今行く！」

そして赤井を見て「では、私達も。」

赤井頷き夏美と共にライカの待つ車の前に行った。

こうしてコナンを始め乗客達は警視庁の事情聴取を受け其々の自宅等へと戻って行った。

第12章。悲劇の2月23日（日）最終後編4。完。

第12章。悲劇の2月23日（日）最終後編4。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

と共にバスジャック編は此れにて終了なのですが・・

ワカバ等の事も書く予定でありますので・・

この小説は多分後しばらく続くと思いますので

最後までお付き合い頂ければ幸いです。

オマケ

夏美「ああ・・疲れたよ。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくね!」

第13章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（前編）（前書き）

約2日ぶり？の更新となりましたか・・・。

今章ではバスジャックから解放され夏美達が無事にワカバに帰還する所を

前提として書かせて頂く予定です。

第13章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（前編。）

アレから警視庁の事情聴取を受け終わってワカバに戻った夏美達。

そしてボスであるオウガに無事帰還した事を報告し・・・2人はワカバの1階にある行き着けの

バーにより2人で飲んでいた。

マスター「しかし、リーダー、副リーダーこの度は災難だったね。」

其れを聞いた夏美は苦笑いをしながらタバコに火を灯し「ああ。まさか・・・せつかくのオフで、

都内めぐりする予定だったんだが・・・ジャックされるとはね。」

ライカブランデーを飲みながら「でもね・・・マスター。犯人達こいつの顔見たら一瞬

怯えていたよ。」と夏美を見ながら笑って言った。

マスター「え？どうしてだい？副リーダー？」

ライカもタバコに火を灯しながら「マスター。相棒の兄さんの、もう一つの職業、忘れたかい？」

すると、マスターコップを取り出しウイスキーを注ぎ込みながら「ああ。雄大さんね。」

確か、神奈川県警の警視だったけ？」

ライカタバコを吸いながら「ああ。だから、多分、無事でいられた

んじゃないかな、？」

夏美もタバコ吸いながら「まあ……。其れも一理あると思うが、うちらの『小さな相棒』に

『感謝しなきゃね』。」

ライカ「ああ。そうだな。」

すると、ベルモットが入ってきてライカの隣に座った。

マスター其れに気づき「いらっしやい。ベルモットさん。何します？」

ベルモット「マティーニお願いできる？」

マスター「畏まりました。」

そう言いマティーニを作り始めそしてカクテルグラスに注ぎ込みベルモットの前に出した。

ベルモット微笑んで「有難う。」

すると、夏美「ベルモットさん。」

ベルモット「何？夏美。」

夏美タバコ吸いながら「1つ伺いたい事が・・・。」

ベルモットマティーニを飲みながら「何かしら？」

夏美「バスジャックされたバスの中に貴女変装して乗っていましたよね？」

其れを聞いたベルモットクスと笑い「あら、良く分かったわね。
その通りよ。」

と続け様に「誰に変装したかも、分かった？」

夏美「此れは、あくまでも私個人の考えですが・・ジョディさんですよね？」

ベルモット「フフッ。正解。」と続け様に「でも、どうして分かったの？」

夏美フツと笑い「アレですよ。A secret makes a woman womanですよ。」

あれを使うのは私が知っている限り、貴女、だけですからね。」

ベルモットもタバコに火を灯し「さすがね。昔・・・。炎龍と呼ばれた事があるわね。」

夏美。「と再びクスと笑った。」

夏美苦笑いをし「ハハ。『お褒め頂き』有難うございます。」

そしてマスター夏美を見て「そう言えばリーダーもうお酒飲み終わっただね。何か『作ろうか』？」

夏美からになったグラスを見て「おや・・本当だ。何時の間に飲んだんだろう。」

と続け様に「ま・・良いや。マスター。ジンライムお願いできるかい？」

マスター「了解。ちょっと待っててね。」

そしてジンライムを作り始めからになったグラスに入れて「はい。お待ちどう。」

夏美「有難う。」そしてジンライムを飲み始めた。

と同時にジンが夏美と有理の姉梓を連れてやって来た。

第13章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（前編。）完。

第13章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

予めお断り致しますが作者はお酒には詳しくありません。

自分が今まで飲んだものまた、コナンに出て来たお酒を見て書かせて頂きました。

その辺もご理解とご了承願います。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみいただければ幸いです。

オマケ。

ライカ「次章もどうぞ宜しく！」

第14章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（後編）（前書き）

今章は前章の後編となります。

此方も恐らく長丁場となりますのでご了承くださいと思います。

第14章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（後編）

するとライカジン達に気づき一礼する。

夏美「ん？誰か来たの？相棒？」

ライカタバコ再び加え直しニヤリと笑い「ジンの兄貴様とお前さんの姉さんだ。」

其れを聞いた夏美は一瞬ビクとなった。

其れを見たジンククと笑いながら夏美の隣に座り右手で夏美の左肩を持ちながら

「何だ？その様子だと俺達が着てはまずそうな感じだな。ええ？夏美よ？」

夏美ハハッと苦笑いをし冷や汗をかきながら「い・・・いえ。そつ、

そんな事無いですよ。

ジンさん。只・・・行き成りだったもので驚いてしまっただけの話でして・・・。」

ジントバコに火を灯しながらニヤリと笑い「ほう。そうか。」と続け様に「ジントニック頼む。」

と続け様に梓を見て「お前は？」

梓「ジンライムを・・・。」

マスター「ジントニックとジンライムですね。畏まりました。」

ジン達に一礼し作り始めた。

すると、ベルモット「ねえ・・・ジン。」

ジン「何だ？ベルモット？」

ベルモットクスと笑いながら「2月23日（日）のバスジャック事件でね。『面白い男の子』」

見つけたわよ。」

其れを聞いてジン「ほう。んで？どういった奴だ？」

ベルモット再びマティーニを飲みながら「メガネを掛けた小学1年生位の男の子よ。」

他の小学生より、頭（頭脳）が切れる子よ。」

ライカと夏美は其れを聞いて・・・。

コナンの奴だ！

と叫んでいた。

すると、マスター「お待たせ致しました。ジントニックとジンライムでございます。」

そう言いジン達の前に出した。

ジン「悪いな。」

梓「有難う。」

そして2人とも頼んだカクテルを飲み始めた。

と続け様に梓「で？その子、気に入ったの、？ベルモット。」

ベルモット再びクスと笑い「ええ。‘気に入ったわ’。とてもね。」

夏美ジンライム飲みながら・・・。

コナンの奴……。ある意味、^{ヒト}凄^{ヒト}い女^{ヒト}に、気に入られた、な……。

さて、この後どうするか？？

と呟いていた。

その様子をライカは只見ていた。

と同時に梓「夏美。」

夏美「ふえ……。？な、何？？姉さん？？」

梓「この度は、災難だったわね。ある意味・・・。」

夏美苦笑いをし「ん・・・ま、ね。でも、ある意味楽しかったよ。」

ライカ「嘘付けッ！お前さん一時期、機嫌悪かったじゃないか！」

と笑いながら突っ込んだ。

夏美「あ、アレはアレッ！こ、此れは、此れッ！！」と笑いながらはぐらかした。

そして続け様に梓「その子の名前知ってる？夏美？」

夏美「え？何で？」

梓「だって・・・噂ではそのメガネの少年と貴女良くつるんでいるみたいだから・・・。」

夏美「ああ。まあ良くって訳でもないけど・・・知ってるよ。江戸川コナンっつんだ。」

梓「へえ。面白い名前ね。」

夏美「身内の中でコナン・ドイルファンの人がいるらしい・・・。ま

あ・・。私しやあもあまり

詳しい事知らないけどね・・。それがどうかした？姉さん？」

梓フツと笑い「ううん。只・・ベルモットもそうだけど・・貴女の
‘お気に入りの子’の名前が

気になった・・其れだけの話よ。」

夏美再びタバコ吸いながら「そうか。」

と呟いていた。

その様子をジン達は黙って見ていた。

第14章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。（後編。）完。

第14章。夏美とライカ無事にワカバに帰還する。(後編)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は多分コナン達の事を書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いしますッ！」

第15章。バスジャック後のコナン達。（前書き）

今章では、主にコナン達の事について書かせて頂きました。

尚、此方も多分長丁場となると思われますのでご了承頂きたい
ます。

第15章。バスジャック後のコナン達。

一方、此处は阿笠家。

バスジャック後真弓の様子が、おかしい、と思ったコナンは哀から連絡を貰い。

阿笠家に来ていた。

すると、真弓は只リビングにあるソファでボーゼンとしていた。

コナン哀を見て「おい。灰原。碇の奴ずっと、アレから、あんな感じなのか？」

哀頷き「ええ。もう、ずっと、よ。あまり食事も取っていないの。」

コナン「そうなのか？」

哀再度頷いた。

そして、コナン真弓の所に行き「よお。」

真弓「ん？ああ。相棒か。」

コナン「ああ。俺だ。」と続け様に「大丈夫か？」

真弓「まあ……。何とか大丈夫。」

コナン「・・・そうか。」

と言い真弓の隣に座った。

と同時に真弓「あの時は、有難うな。」

コナンフツと笑い「ああ。気にするな。」

と同時に「で？、奴等の仲間、いたのか？」

真弓頷き「ああ。間違いない」。確実に居た。」

コナン「・・・そうか。」

と続け様に真弓「・・・相棒。」

コナン「ん？」

真弓「これからも・・・私じゃあの『相棒』で居てくれるか？」

コナンフツと笑い「バーロー！当たり前えだろう！俺達は『昔からずっと良き相棒同士』！」

其れは『今後共変わらねえよ』！」

真弓も其れを聞きいて微笑み返し「有難うな。相棒。」

その様子を遠めで見ていた哀はフツと笑い。

まったく・・・あの『探偵コンビ』さん達には『叶わない』わね。

勿論その場には博士も居て「良かったのう。哀君。」

哀頷き「ええ。そうね。博士。」

一方、外では黒いシボレーC-1500が停まっいて赤井が密かに阿笠家を見ていた。

其れと同時に真弓一瞬、何かの気配を感じ、ソファーから急いで立

ち上がり窓を見た。

するとシボレーに乗っている赤井と目が合った。

真弓

・・あの男。バスジャックの時の乗客の1人。

何か‘怪しい’わね。

と心の中で呟いていた。

と同時にコナンも来て真弓と同じ窓を見て「!」

あ、あの男!

確か、バスジャックの乗客の1人!

事情聴取で赤井秀一って言っていたな。

でも……。

どうしてあの男が、此処に?

そして真弓の様子を見て一瞬怯えているのを見て「碇。リビングに
戻ろうぜ? な?」

真弓頷きコナンと共にリビングに戻って行こうとしたその時

コナン再び赤井を見てカーテンを閉めてリビングに戻った。

赤井はその様子を見た後その場を走り去って行った。

第15章。バスジャック後のコナン達。完。

第15章。バスジャック後のコナン達。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、この小説も多分・・・後2、3話????位で終わる予定です。

と言いますが、ひょっとしたら増えるかもしれません。

まああくまでも予定は予定ですが・・・（汗）

さて、次章は多分バーから戻った夏美が赤井さんと電話での会話また

は会う所を書かせて頂こうと思っています。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「・・・あの男は一体？」と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします!」

第16章。夏美と赤井との電話での会話。（前編。）（前書き）

少々お久しぶりの更新となりましたが・・・。

今章では、バーから先に戻った夏美がワカバの喫煙所で赤井さんと

話している所を主に書かせて頂く予定です。此方も此方で

恐らく長丁場になる恐れがありますのでご了承頂きたいと思います。

第16章。夏美と赤井との電話での会話。（前編。）

此処は、ワカバの喫煙所。

夏美はアレからバーから先に帰り一服しながら赤井と電話で話していた。

夏美「そうなんですか。コナン達を見に・・・」

赤井「ああ。」

夏美タバコ吸いながら苦笑いし「でも、気をつけてくださいよ？秀さん。私はまだしも・・・」

コナン達は貴方の「正体」知らないんですから・・・絶対に「怪しい奴」だと思われていますよ。」

其れを聞いて赤井フツと笑い返し「まあ・・・そう思われても仕方ない」か・・・」

其れを聞いて夏美も再び苦笑い返しながら続けて「でも、秀さん。
「怪しまれない為」にも

コナン達に貴方の「正体」話すべきじゃないですか？」

赤井「いや！其れは出来ないッ！まだ・・・駄目だッ！」

夏美ため息を付きながら「分かりましたよ。でも・・私知りませんからね？

このままコナン達に怪しまれ続けても・・。」

赤井フツと笑い「ある意味、酷いな。」

夏美「だ・・だって、わ、私、立場上、一応、微妙な、所に居るんですから。」

と慌てながら苦笑いをした。

赤井は其れを察知したのか「・・・成る程。」と笑いながら呟いたと同時に

「夏美・・・さっきから『ノイズ』が気になるのだが・・・？」

夏美「ふえ？『ノイズ』ですか？」

そう言われ辺りを見渡す。

すると「ハハ・・・」

空気清浄機の後ろに盗聴器があった。しかもごく丁寧に・・・小型力メラ付き’。

で色は薄茶が掛かった黒。

夏美は其れを取り出し

姉さんだな。きつと・・。

と呟いていた。

第16章。夏美と赤井との電話での会話。（前編。）完。

第16章。夏美と赤井との電話での会話。（前編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。さて、この小説ももうソロソロ？

終焉に迎えそうです。はっきり言いまして・・・この小説への「ネタ」

がほぼ付きかけてきています（汗）

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「「やられたな」。」と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

第17章。夏美と赤井との電話での会話。 (後編) (前書き)

前章の後編です。

此方も恐らく長丁場になる予定ですのでご了承下さい。

第17章。夏美と赤井との電話での会話。（後編。）

赤井「ん？どうした？」「厄介なオマケ」がついていたか？」と皮肉
笑いをして聞いた。

夏美タバコ再び口に加え直し「ええ。」「ちよいと厄介なオマケ」で
すが……。恐らく、薄茶の黒

ですから、うちの「心配性な姉さん」が仕掛けたんでしょう。」「と
笑い返しをしながら言った。

其れを聞いた赤井「ホォー。そうか。でも、夏美。その「心配性な
姉さん」はいつも「奴」

とつるんでいるのだろう？。」「

赤井が言う奴の事はジンの事。

其れを聞いた夏美ハツと我に返り冷や汗をかいたと同時に只固まり・。
・。

そ！そうだった！何時も姉さん、ジンさんと一緒にいるんだった！！

ど、どうしよう！！

もし、ジンさんが側に居て此れ見られたら・・・また・・・どやされるよ。

ハアゝ。

どうしよう。

一瞬夏美の脳裏に皮肉にも何時もの様な不敵な笑みを浮かべたジンが過ぎっていった。

夏美「・・・・・・・・汗。」

と同時に「あ、あの・・・秀さん。」

赤井「何だ？」

夏美引きつり笑いをして「も、申し訳ないですが・・ソロソロ、切っても、良いですかね？」

赤井ニヤリと笑い「駄目だって、言ったらどうする？」

夏美「か、堪忍してくださいよお。姉さんが盗聴器仕掛けた事分かった今・・私等がこれ以上

「話すのも、いさかさ危険かと・・・。」

赤井「ホォー。もしかして、奴にどやされる、って思ったのかな？」

夏美ギクッ！！！！

赤井フツと笑い「どうやら、図星、の様だ。ま・・精々、耐えるよう頑張る事だな。」

夏美「あ、あの・・秀さん。人事の様に聞こえますけど？」

赤井「そうか？まあ・・・。俺から見ればそうかもしれんな。」と

笑いながら言った。

其れを聞いた夏美物凄くがつくりとして「ひ、酷くないですか？ 秀さん？ 私等、仮にも、兄妹分

ですよ？」

赤井「そうだったな。まあ・・・やばくなりそうだったら何とかしてやるよ。」

と続け様に「じゃ、また近い内に連絡入れる。」

そう言い携帯を切った。

夏美「あ！ちょっ！秀さん！」と続け様にため息を付き再びタバコを口に加え直して

「さあて・・・。弱つたな」。

すると再び夏美の携帯がなった。

夏美「ん？再び着信？」

ディスプレイを見た。

すると一瞬で固まった。

ディスプレイ。

GIN。^{ジン}

となっていた。

一方、此处はワカバの梓の部屋。

まあ・・・正確に言えば梓とジンの部屋。

梓を始めジン達かが夏美の様子をモニターを通し見ていた。

ジン「さあ・・・早く出るよ。夏美。」とニヤリと笑いながら見ていた。

梓クスと笑い「ねえ・・・ジン。お願いだから・・・あまり妹を虐めないでね？」

すると、ジン片腕で梓の肩を持ちながらニヤリと笑い「何心配するな。梓。只なあと

「可愛がつてやるだけだぜ」？」

すると、ウォツカ「兄貴。姉さん。誰か喫煙所に入ってきましたぜ？」

ウォツカに言われジンと梓は再びモニターへ。

すると梓「あら。ライカだわ。」

ジン再びニヤリと笑いタバコに火を灯し「面白れえじゃねえか。このまま見てみるか。あいつが

どんな反応をするかな。」

梓「携帯かけたまま？」

ジン「ああ。」

一方、此処は再び喫煙所。

ライカは夏美と合流していた。

ライカ笑いながらタバコに火を灯し「どうした？相棒？」「顔が引きつってんぜ？」

と同時に携帯の方を見て「携帯鳴ってんぞ？出ないのか？」

夏美は固まり続けた。

ライカタバコ吸いながら「なあ……。お前さんのその様子を見て電話相手当ててやるうか？」

と続け様に「ジンの兄貴様だろ？」

夏美コクリと頷いた。

ライカ「やっぱりな。出たほうが良いと思うぞ？赤井の兄さんとは
違い・・・」

あの人「気短い」から。」

夏美「・・・ライカ。其れ言っちゃあまずいよ。姉さん見てるんだ
もん。」

ライカ苦笑いをした。

そして、夏美は観念したかのようにようやく電話に出た。

第17章。夏美と赤井との電話での会話。（後編。）完。

第17章。夏美と赤井との電話での会話。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

と同時に最後は微妙な終わり方になってしまいました。・（笑……）

さて、この小説も多分残りわずかとなる予定です。

次章は、ジンの兄貴様の電話後を書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「……………」

「次章も宜しくね……。」

第18章。ジンとの電話の会話の後。（前書き）

今章では、夏美がジンの兄貴様との連絡を終えた所から書かせて頂
く予定です。

此方も多分長丁場になる恐れがあります。

第18章。ジンとの電話の会話の後。

夏美はアレからジンからの電話に出て話をしまるで何かを観念しながらため息交じりで

「・・・分かりました」。『そう言い携帯の電源を切って深くため息を付きそして、今まで吸っていた

タバコを灰皿に揉み消し再びタバコを取り出し火を灯した。

ライカタバコ吸いながら夏美のその様子を見て笑いながら「お前さん。その様子だと、どうせ

『後で俺の部屋に来い』。とても言われたんだろう?」

すると一瞬夏美ギクツとなりながらも黙り込んだ。

ライカ其れを見て再び笑いながら「『凶星』だな。お前さんは本当に色々な意味で、分かりやすい」

奴だよ。本当。」

夏美罰悪そうに顔をしかめながらタバコ吸い続けながら「・・・ほっとけ。」と呟いた。

ライカ「あれ？もしかして、『機嫌悪くさせたか？』相棒。」

と恐る恐る夏美の顔を見ながら若干焦った顔で言った。

夏美が機嫌悪くなると・・・どっかしら鎖がはずれ火炎風拳の暴走モードが発動する

恐れがあるからだ。

夏美フツと笑いタバコを再び口に加え直して「いいや。大丈夫だ。気にするな。」

と続け様に「あのバスジャック以来何故か知らんがここん所最近、ろくに寝れて、ねえからな。」

其れを聞いたライカ「お、おい！だ、大丈夫か？相棒？」

夏美タバコの煙をフーと吐き「いいや。大丈夫だ。でも、
「凄く眠い」と言う事には

変わりはないからな。」と続け様に「さて・・・これ以上ジンさんをお待ちさせるとあれだから・・・

そろそろ行くわ。」と灰皿にタバコを揉み消した。

ライカ「ああ。気をつけてな。」と続けて「健闘を祈るぜ！相棒！」と笑いを含んで言った。

夏美横目でハハと苦笑いをし「ああ。『祈っておいてくれよ』。相棒。」と続け様に

「だったら・・・変わってくれねえか」？」

ライカニヤリと笑い「イ・ヤ・ダ！今回は、秀の兄さんと会話していた事を梓の姉さんの盗聴器に

気づかずに平然としていたお前さんが悪い。」

夏美苦笑いをして「・・・『薄情者』。それでもお前・・・『相棒か

よ。
」

ライカ再度ニヤリと笑い「ああ。そうさ！私はジンの兄貴様とのお前さんの『楽しい時間を』

邪魔したくないからな。
」

其れを聞いた夏美横目でライカを見た後無言のまま喫煙所を後にした。

ライカ其れを見てタバコを口に加え直しながら「・・・ちよいとやりすぎたかな？」

と反省しながらボソツと呟いた。

一方、ジン達は夏美達のそんなやり取りを見ていた。

と同時にジンだけが何故かとても楽しそうな笑みを浮かべていた。

第18章。ジンとの電話の会話の後。完。

第18章。ジンとの電話の会話の後。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございました。

さて、次章は、夏美がジンの兄貴様に「尋問」された後を書かせて頂く予定です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

夏美「・・・気がだるいな。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第19章。ジンの「尋問後」の夏美。（前書き）

今章は、ジンの兄貴様にどやされた（尋問）の後自分の部屋に戻った夏美を

主に書かせて頂く予定です。

今章では、ジャンル違いですがライチュウが出てきます。

その辺もご了承下さいます様宜しくお願い致します。

第19章。ジンの「尋問後」の夏美。

喫煙所でタバコ吸い終わった夏美はジンに案の定アレから呼び出しをくらい。

赤井とのやりとりについて「尋問」どやされる羽目になった。

その後、自分の部屋に戻った。

夏美頭をかきながらタバコに火を灯し「あゝあ。また、どやされたよ」。ジンさんのどやし方

はもうある意味「半端」じゃあねえからな……。」と呟いた。

すると、偶々同席していたライチュウが「でも、夏美様。結構「楽しんでいた」様に「見えましたよ」

？」とクス笑い。

其れを聞いて夏美「・・・あのねえ。」

と続け様にライチュウ「だって、あの時の夏美様、笑っていましたよ。」

夏美タバコを吸いながら「馬鹿やろお！ジンさんに何時もの様にあの、不敵な笑みで、尋問され

ちゃあ・・・こつちだって、笑うしかないっつうの！」。

と続け様に「でも・・・顔、引きつっていただろ？」と笑い返して言った。

其れを聞いたライチュウ思わずニコリと微笑んで「はい。」ときっぱり言い切った。

夏美指を鳴らしながら「ライチュウ．．。お前って奴は〜!」ニヤリと笑みを浮かべて

ライチュウに近づいた。

ライチュウハッと我に返り「い．．いや! な、夏美様ツ! ベ．．別にそう言った意味で

言っただんじゃあ．．．。」

夏美「んな事は聞いてねえ。何であん時、助けられなかった、んだよ！ああ？！」

ライチユウ

や・・ヤバイよ？

な、夏美様。顔笑っているけど怒ってるよ。

よぉーし！こうなったら！

ライチュウ「な、夏美様。お、お許し下さい。こ、此れは、不可解抵抗、でして・・・。」

と顔を引きつき笑いをしながらと続け様に「じゃーわ、私は再びジンの様の下に行って来ます！」

そう言い走ってジンの下に行った。

夏美「あ！コラッ！待てっ！ライチュウ！」

と停めたが時既に遅し。

と同時に「あ・・あいつ。この事ジンさんに報告するつもりじゃあねえだろうな。」

と呟いた。と同時にタバコの灰が少し落ちてきて夏美の足元に落ちた。

夏美「！！あ、熱ちちち！！」

と慌てて灰を落しかかどで踏みつけた。

一方、ライチュウはそんな主人をよそにジンの側に行き相変わらずジンに可愛がられていた。

第19章。ジンの‘尋問後’の夏美。完。

第19章。ジンの「尋問後」の夏美。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、この小説も後多分1話位で終りにしようと思っています（あくまでも

予定ですので変更があるかもしれません。その辺もご了承頂きたく
思います。）

さて、次章は、夏美の所に真弓が来る所を書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライチュウ「じ、次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第20章。真弓、夏美の所を訪れる。そして……。(エピローグ)(前書き)

今回、2度めの更新となりますが、今章でこの小説も最終章を迎えます。

(只、微妙な部分もありますが・汗)最後は夏美と真弓との会話で締めくくり

たいと思います。此方も此方で恐らく長丁場になる恐れあります。

第20章。真弓、夏美の所を訪れる。そして・・・（エピローグ）

アレから、夏美は窓を見ながらずっとタバコを吸っていた。

すると、ノック音が聞こえ「あれ？誰だろう？どうぞ！開いてるよ！」

すると「失礼します。」そう言い1人の少女が入ってきた。

夏美は彼女を見て驚き「ま・・・真^{まゆ}！」と透かさずにタバコを灰皿に消し

駆け寄った。

夏美は彼女の正体の事を水野渚だって事を知っているが・・・

此処ではジン達も居るゆえあえて偽名の碇真弓として呼んでいる。

真弓「こんにちわ。夏さん。ごめんね。唐突に・・・。」

夏美「い、いや・・・。別に私じゃあは構わないけど・・・。」と辺りを見渡し小声で

「でも、大丈夫なのか、？此処にはあの男達^{ヒト}も居るんだぞ？」

あの男達^{ヒト}〓ジン達の事。

真弓も小声で返し「大丈夫。何とか・・・。」と続け様に「其れはそうと、夏さん、あの強盗犯

捕まった？」

夏美頷き「ああ。アレから冴子さんにメモリーカード渡して何とか捕まえてくれたそうだ。

まあ・・・此処はやはり警察の内部事情だからこれ以上は秘密と言う事で・・・と言っらしいが。」

真弓「そう。」

夏美少し真弓から離れてタバコを取り出し再び火を灯しながら「あの時」はお互い災難だったな。」

真弓頷き「ええ。そうね。」と続け様に「でも、あの時も、また相棒に助けられちゃった。」

夏美頷き「・・・そうか。」と続け様に「んで？お前さんこれからどうするよ？」

真弓「どーするも何も、私は此处、米花町、でのんびり暮らし続けるだけ。」

と続け様に「所で、夏さん。」

夏美「ん？」

真弓「あのバスジャック後、何か黒いニット帽の男に保々ずっと付けられている、様な気がするの。」

それも、その男はあの時のバスジャックの乗客の1人なんだ。」

夏美「その男……。黒のシボレーに乗っていなかったか？」

真弓「頷き」「そう！乗っていた！って・・・夏さん知ってるの？」

夏美タバコを吸いながら「ああ。知っているよ。私の知り合いの男ヒトさ。ちよいと訳あり

でね。今の所は申し訳ないんだが・・・『言えないのさ』。まあ・・・多分その内だが、

『分かるよ』。』

真弓「・・・分かったわ。」「そう言い「じゃ・・・ソロソロ私行くね。」「

夏美頷き「ああ。気をつけてな。また近い内に、会おう。」

真弓頷き部屋を出ようとするが・・再度夏美に振り向き「夏さん。私、逃げないよ」。

此れから、私は私の、運命に、向かって、向き合いながら戦い続けるよ。」

夏美其れを聞いて一瞬驚いたがその言葉の意味を何となく察知したのかフツと笑い

「頑張れよ」相棒。」と言った。

真弓頷き今度こそ夏美の部屋を後にし阿笠家へと戻って行った。

戻る途中で・・・真弓。

「逃げないよ！」相棒！（新一）私じゃあは・・・。

‘逃げないよ！’己と向き合うよ。

お前さんと‘同じ様にね。’と呟いた。

第20章。真弓、夏美の所を訪れる。そして……。
（エピローグ。
完。

第20章。真弓、夏美の所を訪れる。そして・・・（エピローグ）（後書き）

今章でこの小説も最終章です。

今までお付き合い下さり有難うございました。

次回作は・・・まだ多分当分先になりそうです。

まだ、書き途中の小説も3つ位残っていると思いますので・・・。

しかし、思いついたら一応題名とあらすじ等だけでも書かせて頂く

予定です。其れでは・・・残りの連載小説も引き続き宜しくお願い致します。

オマケ。

真弓「今小説もお付き合いくださいまして有難うございます。

また、いずれどこかでお会いできる事をお祈りつつ・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0198i/>

「闇の使者とバスジャック。」

2010年10月8日14時37分発行